
ゴッドファーザー乙女

城弾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴッドファーザー乙女

【Nコード】

N7875S

【作者名】

城弾

【あらすじ】

不良の巣窟と言われる学校の新任教師大原乙女。彼女はかつては不良で、そして男子だったと言う。それを裏付けるがごとく不良男子が女子高生へと転じていく。孤独な戦いを決意した不良生徒。秋津だが

自サイト「城弾シアター」からの転載です。

Lesson1「GFO」God Father Otome」

都内某所。そこには荒れ果てた校舎があつた。

窓ガラスは大半が割れ、グラウンドも荒れ放題。

花壇の花は枯れ、まるで廃墟のような「学校」だった。

周辺でも噂の不良がいると言う高校。

彼女はその校門で感慨深げに校舎を見上げていた。

「この学校に先生として戻ってくるなんて、なんだか不思議ね」

澄んだ綺麗な声で一人つぶやく。

やがて表情を引き締めかかとの高い靴で優雅に足を運び、ゆっくりと中へ入っていく。

Lesson1 GFO」god father otome」

校長室。一人の初老の男と若い女性が対面している。

「あなたの噂は聞きました。ですが悪いことは言いません。やめた方がいい。普通のクラスを受け持っていたきたい」

必死になって止めているのがこの部屋の主である校長だ。

半分髪が抜けた痩身の初老の男性。

「校長先生」と言われてイメージする典型的な姿だ。

「この学校の大半は健全な生徒たちです。しかしあいつらだけでこんなに荒れ果てているのです。もし女性であるあなたに何かがあったら」

「大丈夫です。私、そう言う生徒たちがいるからこそここに来ました」

自身満々な彼女。実績はある。だがそれだけが理由ではない。

「それにここは私の母校ですし、やっと恩返しが出来るんですね」
止められていたのは校門で見上げていた彼女。

「ですが…」

「お任せください。かつて同じように道を踏み外した私なら、彼らの気持ちもわかりますし、きっと心を開いてくれます」

決意は固い。校長が折れた。

「そうですね。そこまでおっしゃるのであればお任せします」

そこでふと笑みが漏れる。

「しかし変われば変わるものです。あの手のつけられなかったあなたが」

「やだ。先生。昔のことは言わないでください」

頬を染め身をくねらせる女性。およそ緊迫感がない。校長はどつと疲れが出た。次に進めようと考えて発言する。

「それでは教室まで案内を」

「あ。それも大丈夫ですわ。昔と位置が変わってないですよね？」

女教師は笑顔で答えた。

秋なのに春の花がさくような笑顔だった。

誰も近寄ろうとしない教室があった。通称もストレートに「不良クラス」

正式にはZ組。各学年にある不良専門のクラスだ。

「Z」はアルファベット最後の文字。これ以上行きつくところは無いという意味でつけられている。

各クラスから「はじめられた」者たちがここにまとめられている。

それだけに手のつけられないワルばかりだ。

殺人以外はぜんぶやった。

「…って、それじゃ『のぞき』だの『痴漢』までやったみたいじゃないか」

いまだきリーゼントの男がこちらに食ってかかる。

天の声に食って掛かるほどだ。どれほどの不良か知れるというものの。

「あ。それなら俺がやったから」

全体的にサルを思わせる小柄な男がへらへらという。髪も短い上に茶色だから余計にサルを彷彿と。

「やってたのかよ？ 尾藤」

「電車が揺れた弾みと言うことにして触りまくり」

「けっ。チキンが」

とんだ邪魔が入ったがとにかくこのクラスは悪の中の悪どもで構成されていた。

ゆえに通常のクラスよりも少ない人数だ。全員男子。

がらつと扉が開けられる。

いつもなら別に誰も注目しない。

だが入ってきたのが女性となると話は別だ。

まずあり得ない事態である。狼の群れに羊を放つようなものだ。

「お…おとおっ」

好き勝手に行動していた面々が思わず注目した美女。校長室で会話していた女教師だ。

彼女は不躰な視線が浴びせかけられる中を、まるでファッションショーのモデルのように教壇へとまっすぐ歩く。

身長は普通かやや低め。

顔立ちは美人と言うより『可愛い』と言うほうがしっくりくる。

桜色の唇が化粧していることを示し、大人の女性であることを印象付ける。

それがないと高校生くらいでなら通用しそうな幼顔だ。

さらにかけられた大きな丸いメガネが愛らしい。

栗色の髪の毛がくるくるとカールしてそれが肩を超える長さ。顔立ちとあいまって愛らしい印象。

それに不釣り合いなグラマラスボディ。

明らかにDカップよりあるであろうバスト。

折れそうに細いウエスト。蜂を連想させるほど立派なヒップ。それを濃紺のレディースーツに包みしなやかに歩く。

黒いパンティストッキングの補正がなくとも、その細い足が美しいであることは想像に難くない。

まるでこの世の物とは思えない。想像の世界の美女のようだった。

彼女は教壇の前で止まると向き直りにっこりと微笑む。

教師に見向きもしない不良たちが思わず見入る。

注目を確認するとよどみなく自己紹介をする。

「はじめまして。今日からこのクラスの担任になる大原乙女おおはり おとめです。

教科は英語です」

声すらも綺麗だった。

一瞬おいて沸きあがる教室。

「ひょーっ」

「姉ちゃん可愛いじゃん」

「こっちきて酌してくれよ」

ちなみに本当にビールを飲んでいたりする。

下卑た「喝采」にも彼女は微笑みのままだ。

「けっ。とろくさそーな声した女だ。ロースペックが」

リーゼントの少年が吐き捨てるようにいう。

「い、いや。何か知らないがあの声は怒らせるとスコップでぶん殴られて、きつちりしてないとまずい気がする」

「ああ。天元突破されないように気をつけないと」

「なんだそりゃ？」

無視して会話している者もいる。だがそれを注目させるにふさわしい言葉が彼女の口から。

「赴任期間は今日十一月十五日から三学期の終了まで。それまでにみんなを真人間にしまーす」

問

「間をおいて」文字通りの爆笑が起きる。

「おいおい。何のジョークだよ」

「おれたちや泣く子も笑う不良なんだぜ」

笑われてんじゃ…

「そんな中でもこのラスにや危ないやつらが揃ってやがんだぜ」

「知ってるわ。懐かしいわ。この教室。あのころのままなのね」

新任教師の乙女は遠い日々に思いを寄せるような瞳になる。

（あん？ 前にもこの学校で先公だったのか）

その程度にしか考えないリーゼントの少年。

「あのころの私、やんちゃだったからなあ。先生ともよくケンカしてたな」

「へ？」

笑いが止まる。聞き逃せない一言が出た。

「おいおい。先生。ここは男子校だぜ」

「それでいいのよ」

謎のリアクション。不良たちはますます「？」となる。

「あのころの私は男の子だったし」

今度は笑いが起きなかった。

あるものは「じゃああんな顔と体と声でオカマ？」と恐怖した。
あるものはジョークと取り本気にしなかった。

そしてあるものは

「ざけんな。人をバカにするのも大概にしやがれ」
怒っていた。

リーゼントの少年だった。

立つとかなりの身長だ。180超えないまでも近いのは想像に難くない。

よく見れば中々に好男子なのだが好戦的な態度ゆえ近寄りがたい。

「えーとあなた。阿久津：宏海君だったかしら？」

あきつあきよし

「秋津明義だ。秋津明義。それじゃ商業作品のキャラだろうがよ」

「でも突っ込みポジションなのは同じね」

「うるせえよ」

「それだけツツコミがうまい所を見るともしかして実は心理士？」

「こんななりしたどっからみてもコーコーサーの俺が大学を出たお医者さんに見えるのかよ？」

乙女はいわゆる「どや顔」で人差し指を天に向けつつ言う。

「おばあちゃんは言っていた。『人は見かけで判断してはいけない』」

「限度つてもものがあるだろうよ」

かみ合わなさに明義はめまいがしてきた。

「百歩譲つてあんたがここの『OB』としてもだ。その顔はなんだ？ その声は？ その胸は？ 詰め物が入ってんじゃないのか？」
「なんだ。見たいんだ。もう。それならそうと言ってくれたらいいのに。照・れ・屋・さん」
「はあ？」

この反応にもはやついていけない明義。
対してあくまでマイペースの乙女。

「はい。みんなー。ちゅーもーく。それじゃ私が女である証明をしちゃいます。上と下。どっちがいい？」

爆弾発言だった。バカでも…むしろバカだからこそ言葉の意味を瞬時に理解した。歓声が起きる。

「下！ 下！」とスカートの中身を見たがる者もいれば

「UUUUUUUUUU」と奇妙なポーズをとりながら叫ぶものもいる。

「うーん。どっちにしようかな？ 簡単だから下にする？」

およそ女とは思えない発言だ。秋津が思わず突っ込む。

「上にしとけ。バカやろう」

「秋津う。なに勝手なこと言ってるんだよ。女体の神秘があ」

「うぜーから泣くな。尾藤。どうせスカートの下にや俺らと同じ物があるって落ちだろ。んなの見たくねえぞ」

何故だか明義は「ここのOB」の方を信じる気になっていた。つまりこれは女装と。

どうしてか乙女に自分と同じ物を感じる。

ある意味では彼女の「元はここの生徒だった」と言う言葉を信じていることにもなる。

「そう。それじゃ上にしまあす。みんなあ。よく見ててね」

クリアな明るい声であっけらかんとすごいことを言う。

はったりと思っていた不良たちも実際に彼女がジャケットをキャストオフしたところで注目をせざるを得なくなった。

さらにスカートを外すと完全に乙女が視線を独占した。

まるでじらすようにオフホワイトのブラウスのボタンを外して行く。

エロ本で興奮する段階は過ぎ去ったはずの彼らも、現実にとりップをやられてはいやでも高まって行く。

（おい。まさか本気でトツプレスになるつもりか？）

秋津は不安になった。

乙女は二番目のボタンを外しかけて止める。

さすがに躊躇したかと奇妙にも秋津は安堵した。

「安心して。別に三番目のボタンを外しても水爆が爆発したりしないから」

上目遣いで恥らいつついう。

「なんだよ。そりゃ？」

世代的に知るはずがない。その反応に満足したのかまたボタンを外しかかる乙女。

じらしていたがすべてのボタンを外すとブラウスも脱ぐ。

キャミソールもブラジャーも大人の黒であった。

騒ぎ出す「ガキども」。

硬派を気取る秋津はまともに見ようとしないがそれでもその立派な胸は目に入る。

「どう？ 先生が女だってわかってくれたかしら？」

「わかったから早く服を着ろ」

横を向いたまま赤くなつて言う秋津。

「あら？ 照れているの？」

実はそうだった。女は苦手だった。

（と言うことは元・男と言うのがでまかせか。そりゃそーだ。なんでそれを信じる気になったんだ？ 見た目も性格も女そのものじゃないか）

逡巡する秋津。それをよそに他の男たちは「全部見せる」のコーナー。

特に尾藤は大騒ぎだ。既に興奮状態にある。

「うーん。さすがにこれ以上は先生ちよつと恥ずかしいな」

「だったら最初からそんなに肌を見せるんじゃないねえ」

あくまで見ようとしないう秋津。

「せんせー。もつとよく見せてくれよー」

対照的にがぶりよりの尾藤壘。

「そんなに先生の胸が気に入ってくれたの？」

まるで誘惑するかのような声音。

尾藤は何も考えずリビドーのままにうなづく。

「それじゃ大サービス。えい」

その細腕で意外に強い力をもつて尾藤の頭を抱き寄せ、自分の豊かな胸にうずめさせた。

「おおおおっ」

他の男が大騒ぎだ。当の尾藤自身は興奮せず、逆に母親に抱かれる赤ん坊のように安らぎを感じていた。

「いいなあ。このおっぱい」

もはや何も考えられない。

「欲しい？」

淫靡なようにも清らかにも聞こえる不思議な声音。

「欲しいっすよ。こんなおっぱい自分にあつたら好きなだけ…えっ？」

彼はいきなり乙女から離れた。そして自分の胸元を弄る。

「この感触…なんだ？ そんな」

詰襟と第一ボタンこそ外しているがそれ以外をきちんと留めていた尾藤は学生服のボタンをすべて取り外す。

「な…なんじゃこりゃあっ」

まるで助けた相手から拳銃で撃たれたような悲鳴を上げた。

「おい。どうした？」

巨漢の近田忠一が苦笑して尾藤に声をかける。

その尾藤は泣きそうな表情で自分の胸元を他の不良たちに見せる。

「お、お前、その胸」

どんどんと大きくなっていた。乙女と遜色ない大きさにまで育つ。よく見るとウエストがだぶついている。

不良特有のだぶついたズボンでわかりにくいがヒップが張り出し
ている。

「お、俺、女……！？」

口をふさいだ。声まで甲高い女の物になっていた。
サルをイメージさせる短い茶髪がぐんぐん伸びる。

もとの髪からはかなり長いが女としては短めのシヨートカットに。
右側が勝手にまとまってどこからともなくボンボンで止められる。
シヨートサイドポニーと言うところだ。

「この学校は男子校だから女子制服はないわよね。それじゃ折角の
胸を強調出来るように」

乙女が言々と学生服が明るい色に変わって行く。
だぶだぶのズボンもトンネルが融合しつつ短くなり脚をむき出し
にする。

その脚も無駄毛一つない女の綺麗な足になっている。

ズボンが赤いチェックのプリーツスカートに変化。

ガ克兰の下に着ていたＴシャツがブラウスに。

どこからともなくベストが出現して覆う。

学生服はアイボリーのブレザーに。

「蒼空学園の女子制服をモデルに見ました」

あっけらかんと乙女が言い放つ。

「せんせえー。俺に何をしたんだよお」

半泣きのはずが女の顔と声のせいかなかなり不良たちの心に響く。

（マジかよ？ 尾藤が女に？）

秋津をはじめ全員が驚いていた。

（落ちつけ俺。あわてるな。こういう時は素数を数えるんだ）

どこかの神父のような対処で平穩を維持しようとする者もいる。

そしてこの現象で乙女がここのOBで元は男だったという話が信

憑性を増した。

「きつさまぁーっ。尾藤に何をしたぁーっ」

オールバックの巨漢。近田が力任せに拳を振り回す。相手が「女」だろうと容赦なしだ。

「きゃっ」

反射的に避ける乙女。かわした黒板に近田の拳がめり込む。

「すごい力ねえ。でも当たらなければどうと言うことはないわ」

いつの間にかちゃっかりとブラウスを手にしている。しかも半分くらいボタンをはめ込んでいる。

恐るべき早着替えであつた。

「ぬかせえーっ」

逆上した近田は乙女の顔面めがけて全体重の乗ったストレートを繰り出す。

乙女は屈んでかわすとその前のめりになった近田の腕を取りさらに前方に送り出す。

体勢を崩したところにさらに巻き込むように腕を導く。

そう。近田自身の力をそのまま流しているのだ。

そして彼は女に投げ飛ばされて教室の床に仰向けに叩きつけられる。

「ぐえっ」

カエルが潰されたような悲鳴を上げる。

「ごめんね。すごい力だったからちよつと手加減できなくて」

あろうことが華奢な女に上から見下ろされている。近田はにわかには信じられなくて動けなかった。

「でもこれでわかったでしょ。無駄な力はいらないのよ。当たるときだけこめればいいの。そうすれば先生のこの腕であなたのような大きな男の子を投げ飛ばしたりも出来るのよ」

（確かに細い。こんな腕で俺の体を…こんな無様に倒されては認めざるを…）

近田は腕に違和感を感じた。

半身をおこして上着を脱ぐ。たくましい二の腕が風船がしばむように細くなっている。

「ち、近田っ」「お前もかつ」

「お、俺まで女に？」

既に声が高くなっていた。

オールバックの髪が爆発的に伸びて、腰に達したら勝手にポニテールになった。

険しい顔が優しく。肩幅も狭く、全体的に華奢に。

それでも胸のふくらみはわかる。ただ身長に対して少しさびしげな盛り上がり。

服の方も変化していた。ズボンがプリーツスカートに。

ただし尾藤のチェック柄ではなく青いスカートだ。

トップスもブレザーではない。セーラー服だ。胸元の大きなリボンが特徴的だ。

「近田さんは福真高校女子のセーラー服に見えました。どうせ女子制服はないしね。色々あったほうが楽しいわよ。きつと」

明るい声で言い放つ乙女。生まれ変わってしまった二人の少女は呆然としていた。

「おい。これはどういうことだ？ 二人をどうしやがった？」

秋津が突っ込みを入れる。これはその場の全員が聞いたかったことだ。

「おばあちゃんが言っていた。『この世は自分が中心に回っていると思えば楽しい』と」

「……お前のばあさん。孫の教育方針間違っているぞ。ん？ 自分が中心に？ つまり」

「そう。あの娘たちが望んだ結果がああなの」

いわれて見ると尾藤は乙女の胸を欲しいとつぶやいたら自分が巨乳になった。

そして近田は信じていた力任せを細腕で破られた。すなわちその細腕に負けを認めた。

どちらも乙女を認めた結果だ。

「……それでどうして性転換するんだよ。名刺も受け取ってないだろうが」

いうまでもなくこの界限で有名なセールスレディーのことだ。

「若いつていいわね。無限の可能性を秘めているわ。信じれば男が女になることも出来るのね」

しれつと言いつつ。

「限度があるだろーよつ。それで男が女になるんならこの世にオカマは存在しねーだろーよ」

秋津は頭痛がしてきた。

騒然とする教室。あつという間に男二人が美少女に変えられたのだ。無理もない。

もっともやがてもっと複雑な状況に陥ることには気がついていない。

この元・男の美少女たちにときめいてしまうことに。
何しろ男しかないのだ。そんな中に元は男といえど美少女が二人。

ときめきの一つや二つ抱いても不思議はない。

「落ちついた？ 尾藤さん」

「……先生」

泣き腫らした目で上目遣いで見上げるロリ巨乳。

何人かは下半身に直撃した（笑）

「あらあら。折角可愛いのに泣き顔では台無しよ。そうね。私がゴッドファーザー（名付け親）になって新しい名前をつけてあげる。可愛い名前をあげるから泣きやんで」

「あんたは女だろうが。それでファーザーかよ」

律儀に突っ込む秋津。

「元は男の子だからいいんです」

毅然として言い放つ。都合よく性別をスイッチしている。

「尾藤さんはね、美しく優しくて美優^{びゆう}ね」

「美優：それが俺の新しい名前？　か、かわいいかも」

「おいおいっ」

突っ込む秋津をよそに元・尾藤蛭。現・尾藤美優は自分の新しい名前をつぶやいていた。

乙女は反対側の背の高い女子。元・近田忠一に向き治る。

「あなたは千鶴でどうかしら？」

「素敵な名前。ありがとうございます。先生」

頭を下げる。秋津は頭を抱えた。

（こいつはパワーファイターの分だけ単純なところがあるからな。心酔するとああなるがまさか女にされたつてのにああなるとは思わなかったぜ）

「自己紹介が長引いたけどそれじゃ授業を始めます」

誰も逆らう気になれなかった。逆らって女にされなくなかった。

翌日。

美優と千鶴は駆け込むように教室に来た。

男子校での女子はあまりに目立つ。逃げてきたのだ。

「まったく：いくらこの学校で女子高生は珍しいといえじろ」と
「でもちよつと気持ちよかったかも。そう思わない。千鶴？」

「確かにね。美優。女は見られて磨かれるってこういうことなのだ
な」

思考がだいぶ女性的になっている二人。

よく見ると髪ブラッシングが行き届いている。

「おい。尾藤。近田。お前ら昨日は家族に騒がれたんじゃないのか
？」

不良の割にはきちんと登校してしかもホームルーム前に教室に
いる秋津が尋ねる。

彼の疑問は当然だ。登校した息子が女子高生になって帰ったら騒
がれないはずがない。

「それが不思議なことにな、あるがまま受け入れられた。まるで元
から女だったかのように」

男口調ではあるが千鶴の口調はかなり女性的な柔らかいものにな
っていた。

「それどころかあたしのたんすの服がみんな女の子の物になってい
たの」

「あ…あたし？」

さらつと女としての自己代名詞を使った美優に面食らう秋津。
よく観察すると昨日なつたばかりなのに仕草が既に女性的だ。

「やはり美優もか。私もだ」

「お部屋は？ あたしの部屋は女の子らしくなっていたけど。ぬい
ぐるみもいっぱい」

「ぬいぐるみはなかったが代わりと言うか化粧道具まであった。ち
よつと興味があつたので口紅だけ」

「あー。いいな。ねえ千鶴。持ってきてない？ あたしも口紅塗り
たい」

軽くではあるがガールズトークになって来ている。

（コイツら頭の中まで）

本人は頭痛をおこしている秋津である。

扉が開く。乙女が来た。

とりあえず逆らわずに着席する不良たち。

だが千鶴と美優は反対に乙女に駆け寄る。

「先生。私は女になって自分がいかにおろかな振る舞いをしていたか思い知りました。力があるゆえに逆に見えてなかったのですね」

「あたしもあたしも。女の子になって初めてあたしが女の子に嫌な思いをさせていたと気がついたの」

「二人ともえらいわ。よく一日でそれがわかったわね」

まるで子供にするように二人の頭をなでる。

美優は猫のように気持ちよさそうな表情を。千鶴ははにかんでいるが悪い気はしていないようだ。

二人とも完全に乙女の軍門に下っていた。その証拠の台詞も出る。

「まだまだです。どうか先生。一日も早く先生のような立派な女性になれるように御指導ください」

「あたしもー。可愛い女の子になりたい」

「任せて。二人ともついてらっしゃい」

「はい」

まだ男の少年たちは恐怖した。

性別どころか精神的にも屈服してしまうことに。

それがいやなら恥も外聞もなく逃げるか、ふりだけでも更生して女性化をさけるか。

どちらにせよ屈辱的ではあったが女になった上に従属的になるよりはましだった。

その思いを知ってか知らずか。乙女はにこやかに言う。

「みなさんもこの二人を見習ってくださいね。私がみんなを『可愛い乙女』に変えてあげます」

（ぜっつっつっつたいになるもんか）

例え一人になっても男のままでいてやる。そう心中で固く誓う秋津であった。

彼の孤独な戦いが始まった。

果たして最後に果てしなく長い男坂を登り「未完」とこの物語がなってしまうのか？

それとも彼もまた「少女」になってしまうのか。

それはまた続くお話で。

Lesson1「GFO（God Father Otome）」（後書き）

あとがき

まずはじめにこの作品は手塚治虫先生の『ブラックジャック』第200話『話しあい』

そして椎名孝志先生の四コマ『Dr椎名の教育的指導』の『桜井先生シリーズ』にインスパイアされたことを明言しておきます。

今作は僕には珍しい不条理系で。

なんで乙女に心酔すると女になってしまつのかは明らかにはなつてません。

そのあたりは次回で予定してます。

またこちらは珍しくはないけど久しぶりにパロディを大量に投下しています。

これは逢空万太先生「這いよれ！ ニャル子さん」シリーズに触発されて。

とりあえず何も考えない話です（笑）

登場人物のネーミングはちょっと法則性が。

秋津から見えていくとわかりやすいかと。

登場人物。

主人公の大原乙女。上はその法則性で。下の名はサブタイトルを考えていて上手く合わせやすくして『O』で始まる名前に。

秋津は当初は『阿久津』でした。

では次回。Lesson2『魔法先生オトメ』でお会いしましょう

う。

おまけ「パロティ原典集」

サブタイトル：人気コミック「GTO」から。こちらも教師もの。

天の声に食って掛かるほどだ。…「天の声」はアニメ版「ハヤテのごとく！」でのナレーターのこと。担当は若本紀夫氏。

「けっ。とろくさそーな声した女だ。ロースペックが」

リーゼントの少年が吐き捨てるようにいう。

「い、いや。何か知らないがあの声は怒らせるとスコップでぶん殴られて、きつちりしてないとまずい気がする」

「ああ。天元突破されないように気をつけないと」

…「ロースペック」は特撮「天装戦隊ゴセイジャー」の敵側。マトリンティス帝国のメタルAが仕える相手であるロボゴークから罵られるときに使われる言葉。

「きつちり」と「スコップ」は「さよなら絶望先生」の木津千里。

「天元突破」はグレンラガン。

いずれも声優の井上麻里奈さんが担当したキャラ（グレンラガンではヨーコ）

「えーとあなた。阿久津：宏海君だったかしら？」…大亜門先生の

「大臓もて王サーガ」の登場人物。

不良生徒だが突っ込み担当。

「それだけツツコミがうまい所を見るともしかして実は心理士？」

…「マンガでわかる心療内科」より。

「こんななりしたどっからみてもコーコーセーの俺が大学を出たお

医者さんに見えるのかよ？」

…ジョジョの奇妙な冒険（第四部）でラスボスである吉良と初遭遇したときに主人公。東方仗助のトラップに引っかかった吉良に対して言い放った言葉。

おばあちゃんは言っていた。…「仮面ライダーカブト」の主人公。
天道総司の決め台詞。

その顔はなんだ？ その声は？ その胸は？…「ウルトラマンレオ」でダンがゲンに対して言った台詞と聞くが実は未見。

それをなぞった「ウルトラマンメビウス」の1エピソードで逆にゲンがミライに対して言った台詞から。

原典は「その目はなんだ？ その顔は何だ？ その涙はなんだ？」

「UEEEEEEEEE」と奇妙なポーズをとりながら叫ぶものもいる。

…ジョジョの奇妙な冒険。一部や二部で敵が叫ぶ台詞から。

「安心して。別に三番目のボタンを外しても水爆が爆発したりしないから」

…「キカイダー01」の登場人物。ビジンダーの人間体は三番目のボタンを外すと体内の爆弾が爆発する設定。

「蒼空学園の女子制服…拙作「PLS」の架空の高校。

（落ちつけ俺。あわてるな。こういう時は素数を数えるんだ）

…ジョジョの奇妙な冒険第六部「ストーンオーシャン」でのラスボス。プッチ神父の精神安定法。

近田さんは福真高校女子のセーラー服に見ました。…拙作「戦

乙女セーラ」の主人公の通う学校と女子制服。

「……それでどうして性転換するんだよ。名刺も受け取ってないだろうが」

いうまでもなくこの界限で有名なセールスレディーのことだ。

…真城悠さんの作ったキャラ「華代ちゃん」のこと。

見た目は小学生女児だが彼女に悩みを打ち明けると性転換が待っている。

なおこれはいくつもある話の中から性転換がらみのものだけ物語になっていると言うことで、実際にはもっと多くの事例があるとのこと。

果たして最後に果てしなく長い男坂を登り「未完」とこの物語がなってしまうのか？

…車田正美先生の「男坂」人気が伸び悩み打ち切りになったが、最終回で伝説を作った（笑）

Lesson 2 「魔法先生オトメ」

ゴッドファーザー乙女。前回の三つの出来事。

一つ。手のつけられない不良たちのクラスに美人教師。大原乙女が来た。

二つ。乙女はかつて不良で、しかも男だったと言う。

そして三つ目。不良たちの目の前で二人の少年が美少女に変貌した。

Count the student

現在、少女になった少年は…

「尾藤美優（蛮）」 「近田千鶴（忠一）」

「けつ。くそ面白くもねえ」

秋津明義は不良らしく（？）学校をサボっていた。

目的は喧嘩だった。

授業中だが関係ねえ。そう思い福真高校に乗り込み「高岩あ。喧嘩しにきてやったぞ。出てきやがれ」と叫ぶ。

挑発と言うよりたまった鬱憤を爆発させた。

「お待たせしましたあ」

目当ての人物は長身の男子高校生。自分からは手を出さないが売られた喧嘩は必ず買う。

高岩清良きよしとの喧嘩でストレスを晴らす目的だった。

ところが目の前に現れたのはセーラー服の女子生徒。

短い髪でのツインテール。メガネが可愛さを強調していた。

「何だお前？ 俺は高岩に用があるんだ」

「はい。あたしが高岩せいらです」

屈託のない笑顔。本当に100%女の子だった。

「へっ？」

普通ならここで人違いと結論付ける。だがこの事例を秋津は知っていた。

「ま、まさか女になっちまった？」

「えっ？ やだ。どうして知ってるんですかあ」

可愛い声で無邪気に笑う。反対に秋津は怒り心頭だった。

（あのセンコー。ここでもなにかしてやがったのか？）

彼は文句を言うべく自分の高校へと出向いた。

Lesson 2「魔法先生オトメ」

「くおら。オカマ野郎っ」

怒鳴りつつ勢いよく教室に乗り込むと既に「先客」がいた。

「せんせーよお。いつになったら尾藤と近田は元に戻るんだよお？」

そりこみを入れた堂島大介が教壇の乙女に詰め寄っていた。

彼一人だ。多勢に無勢を嫌ったのではない。他は万が一にも女にされたくないから傍観していたのである。

（先にやっていたか。なら譲るぜ。堂島）

ちよつと気がそがれたのもあり、秋津も加勢はせずに見ていることにした。

「元につて…あの子たちは女の子よ」

乙女は相変わらぬのスーツ姿。どうやら「教師はこうあるべし」と言うポリシーらしい。

「あんまりすつとぼけているとあんたにも全部パンチ食らわしてやるぞ。こらあ」

精一杯すこんで目を剥くが奇妙な単語が引つかかる。

「全部？」「パンチ？」

怪訝な表情をする乙女と秋津。表情の変わる堂島。

「な、なんでもねえ。ハートをキャッチなんてされて」

「ハートキャッチ？」

墓穴の底で墓穴を掘っている。

「堂島。オメーまさかオタクか？ アニメのキャラに対して『萌えー』とか言っている気持ち悪い奴なのか？」

彼自身「オタク」に対していい感情を抱いていない。どこその都知事のようにだった。それが言葉ににじみ出て、そしてそのまま伝わったらしい。

「う…う…あんまりだ」

蔵つい大男がぼろぼろと涙をこぼし始めた。

「お…オイ？ 何も泣くことは」

しかし堂島は人目もはばからず泣きだした。崩れ落ちている。

「あああああんまりだああああああつ」

その様子に秋津は戦慄すら覚えた。

「な、何だ。コイツ。血管びくびくで怒ってくるかと思いきや予想外つ。怒るより逆に不気味なものがあるぜ」

「あんまりだあああ。俺のつぼみがああああ…ばかにされたあああ」

「ま、待て。別に俺は」

「アニメが好きで何が悪いんだよおおおおっ」

堂島は鬱屈を洗い流そうとして泣き続ける。

秋津は引くが乙女はそつと堂島を抱きしめた。

「……先生」

「好きなの？ アニメ？」

その声色や表情に嘲りはない。優しくだけが漂う。

まるで小さな子供が「お姉さん」に優しくされたように堂島大介はこくりとうなずく。

「注ぎ込む愛情があるのはいいことよ」

「……………先生は……………俺のことバカにしないのかよ？」

「どうして？」

キョトンとした表情が可愛い乙女。堂島は対立していたにもかかわらず彼女に心を開いた。

「俺、アニメやマンガが大好きで。でもなめられたくなくて不良として振舞って。グッズ盗んでこのクラスに放り込まれたりもしたけど」

（そんな理由でここにきたのかよ）

秋津は声にたさずに突っ込みを入れる。

「泥棒はいけないわ。でも人に迷惑かけなければ好きなことをしていいのよ」

彼は泣き顔で見上げる。今度は理解者を得たことに対しての歓喜の涙。

「それじゃ俺、アニメ好きでもいいのか？」

「ええ。その欲望。解放しなさい」

「ば、ばか。堂島。その手に乗るな！」

思わず叫ぶ秋津だが遅かった。

「んあっ」

堂島は背筋をそらしのけぞる。何かが内側で爆発したかのような印象。

剃り込みを入れた髪が爆発的に伸びる。そして勝手に二つにまと

まり左右に垂れ下がる。

服は以前の二人ように学校制服にはならず薄いピンクのブラウスと赤いミニスカート。ボーダーのニーソックス。

手にはパステルピンクのステッキ。いつの間にか髪の色もショッキングピンクに。

当然のように幼顔の少女。背も縮んでいた。

「で、でたーッ。城弾作品にかなりの頻度で出るツインテールがああッ」

バラすな。それを。

「にや、にやあ？」

当事者の堂島は変化に驚いて甲高い女声で叫ぶ。

「な、なんかこの声で二つお下げだとバンドのサイドギターって感じがするよ」

「くそうっ。堂島の女体化がこんな可愛いわけがない」

騒然となる教室。乙女だけは満足そうに微笑んでいる。

「あら。かわいい。それがあなたの理想なのね」

乙女は手鏡で堂島だった少女に新しい姿を確認させる。

「こ、これが俺？」

「俺」と言う自己代名詞がまったく似合わない高い少女声。

「すばらしい。新しい堂島君の誕生よ。Happy Birthday ay. おめでとう」

乙女が拍手をして新しい少女の生誕を祝う。

「おめでとう」

自分が被害にあわなかったからか皮肉を込めてあちこちから「おめでとう」の声と拍手が。

戸惑っていた堂島だがだんだん明るい表情になる。

「そうかあ。先生。この姿になるのはこんなにすばらしいことだったんですね」

何しろ目つきの悪い不良がアニメ張りの美少女だ。

「ええ。それでは新しい名前をつけてあげるわ。その華やかな姿。」

それならお花の名前。だりあちゃんはどう？」

「だりあ…堂島だりあ。あつ、ありがとうございます。先生。俺…ううん。あたしこれから可愛い娘になれるように努力します」

あつさり陥落していた。

そのあんまりな事実から目を背けなくなる秋津。だが意地で踏みとどまっていた。

（逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ）

呪文のように唱えていた。

「それじゃ授業を再開します。遅刻して来た秋津君。この文章を読んで」

につこり微笑んで指名した。彼女の担当教科は英語。当然だが英語の問題。

「お、俺？」

反発しようにも目の前でまた一人変えられて戦意をなくしていた。仕方なく言われたままに文章を読みに掛かる。

文章は「turn to back」だった。

「たーん…とう…ばつく…たー…と…たつとつばつ。たとばたとばつ」

まともに授業を受けてないのである。読めもしない。思わず変な節になって歌のようになってしまった。

「秋津くーん。音楽じゃないから歌わないでね」

「……歌は気にするな」

そのときだ。扉が開いて女子二人が入ってきた。

この場で変えられただりあをのぞけば該当者は二人だけ。

「ただいま戻りました」

声に元気がない。

「大丈夫。たくさん怒られたの？」

心配そうな声の乙女。

（おっ）

秋津は心中で嬉しそうな声を上げる。

既に少女と化していた二人。だがそれが怒られるほどのことをしでかした。

（まだワルの魂は残ってたか。尾藤。近田）

内心で喜ぶが

「あんなに怒らなくてもいいのにね。校則違反してないのに」

尾藤美優の唇は真っ赤に彩られていた。

「ホントウだ。おしやれは女の特権なのに」

近田千鶴の頬は不自然に赤い。まっげも遠目にはつきりと見える。二人とも化粧してきたので呼び出されていたのだ。

もつとも男子校である。「化粧禁止」は校則にはないので美優の言い分にも一理ある。

「……………」

秋津の顎がだらしなく落ちた。

「二人とも可愛いわよ。でもまだお化粧は早いかな？」

「私、早く先生のような大人の女性になりたいくて」

だんだん「女の色気」まで出てきた千鶴。ポニーテールから見えるうなじが色っぽい。

「うふふっ。背伸びしたくなる御年頃よね」

言うなり乙女は二人の耳たぶをチェック。ピアスホールがあいていた。

近年では男でも珍しくはないが二人とも男の時はあけてなかった。

「えへへっ。可愛いのがあったんですよ」

「女同士」ゆえがあっさりとはらず美優。スカートのポケットからアクセサリーを取り出す。

それは可愛い女物のピアスと指輪だった。

千鶴もセーラー服のスカートから同様のアイテムを取り出した。

没収は免れたらしい。

どうやら「男性がスカートのチェックはしづらい」と言う知恵まで回りだしたようだ。

もつとも元々が男なので男性心理は熟知していて当然だが。

二人して指輪をはめる。左手の薬指に。その時の表情がうつとりしていたのをクラス全員が恐怖の目で見ていた。

どう見ても結婚願望のある女の表情だった。完全に頭の中から女になっ

もはや男が恋愛対象なのではないか？　そう思わせるほど『女の表情だった。

「いいでしょー。先生。おそろいな」

ひらひらと指輪を見せる美優。

「昨日二人で見つけてきたんです。まあフェイクなんですけどね」
こちらは千鶴。

「えいつ。ウルトラタッチ」

いきなり左手を千鶴のそれにグータッチのように合わせる美優。

「いや。それはわからないからどちらかと言つと『でてこい！　シヤザーン』の方が」

ポニーテールの美少女が言つと即座にリゼントの突っ込みが。

「そっちの方がマイナーだろうがよ」

突っ込む秋津にさらに突っ込むクラスメイト。

（突っ込みポイントが違う）と。

昼休み。学食でテーブルを共にする秋津。美優。千鶴。そしてだりあ。

これだけみていると秋津が女達をはべらしているように見えて体裁が悪いから人数あわせで男子二人をつき合わせていた。

金髪の江原栄治。福本富士夫は痩せ型に丸メガネと一見まともだが、どこか切れた雰囲気がある。

全員定食だったが女たちは明らかに食べるスピードが遅い。その上よくしゃべるから余計に進まない。

「そうか。おまえもか。堂島」

「うん。でもなつてみるとわかるけど女の子っていいよね。男じ

や何かとオタクは白い目で見られるけど女だとそうでもないし」

「コスプレとかするの？」

「する。絶対する。こんなに可愛くなっただもん。やらなきゃ嘘よ」

女三人で盛り上がっていた。

「まったくよ。お前らしいにや嫁にでも行くんじゃないのか？」

「お嫁さん……いいなあ。あたしはやっぱウエディングドレスで」
「私はやはり和風で行きたいな」

ごく当たり前に嫁入りの時を想像している。秋津はいらついてきた。

「おい。てめーらも不良とまでいわれたんだろ。少しは硬派らしくしやがれ。そう。あの人のように」

怒ってばかりの秋津があこがれるような表情になる。

対して美優は「まあたその話？」とうんざりしたようだ。

「もう耳にタコが出来たぜ」

これは黙って食事していた江原。食べ終わっていた。

「いいから聞け。あれは俺がガキのころだった。高熱を出してオフクロが俺を医者につれていこうとしたがその日は都内にはありえないほどの大雪で車の車輪がスリップして途方にくれていたときにその人は現れて男が命の次に大事にしているガクランを車輪の下に置いてスリップから助けてくれて俺自身の命も助かったんだ。俺にとってあの人は英雄で、あの人のあこがれて同じ髪型にしてんのさ。後である人が『伝説の不良』と呼ばれここにいたことを知ったのでここに進学したくらいだし」

改行すらしなくて一気にまくし立てた。恍惚の表情をしている。

「それがいいたくて私たちを呼びつけたのか？」

千鶴の言葉は質問と言うより確認だ。

「思うんだけど……英社に怒られないの？ この話」

……いや……元々パ口られることの多い作品だし。この程度は大目に見てくれると思う（弱気）

「とにかくよ。俺の中にはいつだってあの人の存在がある。だからお前らも思い出せ。不良としての誇りを。そうすれば男に戻るかもしれないぞ」

「それなら既に私の中には理想の男がいる」

千鶴の言葉に嬉しそうになる秋津。

「ほう。なりたい自分か。どんなんだ？」

「ああ。やはり私より強い男だな。男ならではの力で私を軽々と抱きかかえて……バ、ばかつ。何をいわせるんだ」

頬を染める。元は男と知っていても可愛らしく見える。

「誰が理想の恋人を話せと言ったよ？　しかも男が相手かよ」

「えー。だって女の子だもん。あたしはちょっとくらいエッチな男の子がいいな。そのくらい積極的なほうが」

「あたしはオタクな男の子。自分を持つてるもん。それに趣味が一緒の方が楽しいわよ。二人で同人誌を作ったりとか」

「あのなあ……ん？」

秋津は一つ気がついた。

（これって……みんな元の自分じゃねえか？　どう言う事だ？）

秋津は仮説を組み立て始めた。三人が女性化した「魔法」について。

しかしその場にその「魔法先生」が現れて中断させられた。

「あら。楽しそうね」

朗らかに言う乙女。ランチのプレートを持っている。これかららしい。

「あっちにいけ」

邪険にする秋津だが乙女は特に気にせず用件を切り出す。

「ねえ。誰かこれほしくない？」

プリンをおく。

「私ももらったんだけど職員室でチョコプレートを食べ過ぎて……」

「ああ。女ですからね。甘い物の誘惑はね」

同意する千鶴。そして江原がほしそうな表情をしたのを見逃さな

かった。

「それじゃ江原君にあげようかな？」

乙女も気がついていたらしい。

江原は一瞬喜びかけるが「不良のスタイル」と言うことで突っぱねに掛かる。

「プリンだあー。けっ。俺は不良だぜ。プリンなんて女子供の食うものは……」

発言した途端に江原に変化が訪れた。

全体的に縮みだす。この辺りは三人の少女と同じだがさらに小さくなった。

まるで小学生である。髪の毛も快活な印象のあるショートカットに。

ガ克兰の下にはTシャツだったそれがキャラクターもののデザインに。

ズボンがミニスカートに。

挙句には江原の持ち物である潰れた学生カバンが飛んできて、その小さな背中に張り付き真っ赤なランドセルへと変化した。

きつちりと「女兒」に変貌していた。

「え……江原ツ？ な、なんで？」

「江原君。いまうらやましいと思ったでしょ？ 人目を気にせず甘いデザートを食べられる『女子供』が」

「……それでかよっ！」

何が引金になるかわかったもんじゃない。

「か……かーわいー」

「ちっちゃーい」

「ほっぺぶにぶに」

本人が困惑しているが美優。千鶴。だりあは「母性本能」を刺激され次々と抱きしめる。

そのスキンシップで江原本人もだんだん「女の子」の気持ちになつてきたらしい。

「あたし早く大人になりたい。お姉ちゃんたちみたいになりたい」
その言葉にまた内に秘めた女心が刺激される三人の少女。また抱きつかれる。

「あらあら。仲良しさんね。それじゃあなたはエリちゃんと言うことで」

江原栄介改め江原エリ。肉体年齢10歳だった。

「ったく。ガキの高校生なんてどこの飛び級だよ」

悪態をつく秋津。ふと目を向けるともう一人の男子。福本が青い顔で震えていた。

「おい。どうした？ もう驚くほどのもんでもないだろう」

何しろこれで四人が変わってしまったのだ。

「ついに…ついに江原までが…次は俺の番だ…」

「はあ？ 何だよそりゃ。いくらなんでも警戒し過ぎたぜ」

軽く笑い飛ばす秋津に真剣な表情で反論する福本。

「秋津。お前は法則に気がつかないのか？」

「法則？」

自分も考えていた。しかしそれとは違うらしい。

「尾藤。近田。堂島。そして江原。アルファベット順と言うことにッ！」

だからばらすなど。

「ああ。そういうや作者は不良A B Cとしていて面倒だからとそれを基準にネーミングしたんだっただな。ところでLとかQとかXはどうするつもりだったんだか」

飛ばすに決まってる。

「Eの次はF。俺が次だ。もうだめだ。俺はもう男じゃいられない」
激しく気持ちが落ちていた。そして叫ぶ。

「絶望した！ しょーもないことで性転換することに絶望した！」

・古い薬と肺炎で性転換
・服に着られて性転換

- ・太古の遺恨で性転換
- ・放射線で性転換
- ・指輪はめたら性転換
- ・子宝の湯に浸かると性転換
- ・墓参りすると性転換
- ・大ぐらいだと性転換（巻き添えあり）
- ・酔っ払うと性転換
- ・人体実験で性転換：臨床実験といいなさい。

「はたして絶望かしら？」

ひっそりと後ろに立っていた乙女。秋津ですら気配を感じ取れなかった。

「あ、あんな姿にされて……」

希望など持てるかと福本は言いたかった。

しかし眼前の光景は仲むつまじい少女たち。明るく、そして健全だ。

「全ての希望を絶たれて……とことんまで堕ちたら新しい希望が見つかるわよ。破壊からしか再生は出来ないのよ。そう。かつての私のように」

不良として社会からドロップアウトした自分を破壊して、新しい姿でやりなおす。

それがひどく魅力的に見えた。

「せ、先生。俺……あれっ？」

いつの間にかちゃっかりと少女になっていた。

どこか明治や大正の「女学生」を彷彿とさせるはかま姿。身長も胸も控えめ。ただしすらっとした細い腕が魅力的。そして何よりつややかな直毛の黒髪が美しかった。

切りそろえられた前髪がなおさらレトロ。

「まあ。素敵。大正浪漫ね」

「素敵なものかよ。勝手に変えやがって」

「でもないやな気分じゃないでしょ？」

確かにそうだった。恐れていたのにいざなってしまうとそうでもない。

なってしまったのでもう恐怖が消えたのもある。

そして人生のリセットが出来たことに希望を見出した。

「先生。彼女にも新しい名前を」

千鶴が言う。なつたばかりのエリを含めてみんな笑顔だ。

さげすむそれではない。気分のいい微笑だ。

「それじゃ文乃ちゃん」

「文乃：それが新しい俺の：私の名前」

「ようこそ。文乃ちゃん」

美優が手を差し出す。新しい少女を歓迎している。

「やはり決め台詞は『二回死ね』よね」

もうオタクを隠す気がないからさっそくネタに走るだりあ。

泥の中をもがいていたのが雲の上に抜けた気分になった福本文乃。

「ああ。ここに私の希望があったのね。先生。感謝します」

「がんばってね」

ほほえましいやり取りをよそに、頭痛薬を飲む秋津であった。

「ふっざけてんじゃねえぞっ」

秋津は不本意ながら職員室に出向いていた。抗議が目的だ。

校長に直訴とも思ったが実はろくに校長の顔を覚えていない。

校長室に出向けば会えるのはわかるがなんとなく敷居が高い。

そこで乙女の前に担任だった男性教師に話をしに出向いた。

ところがその元・担任が見当たらない。

秋津は職員室のなかできよきよと見渡していた。

（まさか音古河の野郎も女にされた？）

そんなことを考えていたら眼前にとんでもない男が現れた。

「ゲイ」と言われて連想する服装のマツチヨだ。ご丁寧に口ひげまである。

「お…お前。音古河」

美優や千鶴が女性化したその日、家族にはあっさり受け入れられた。

それと同じく秋津もこのマッチョが元の担任。音古河おとこがすけ素樹と何故か理解できた。

ちなみに元々はきわめて細い女性的な男性だった。

その風貌から勝手にホモ呼ばわりを受けていたが

「秋津…やらないか？」

皮の着衣の前方のジッパーを下ろしながら言う。背筋が凍りつく

秋津は音古河を殴り飛ばした。

「職員室で同性の教え子にアプローチかける教師がどこにいるよ？」

「いいじゃないか。恋愛は自由だ。私は解き放たれたんだ」

「！？…もしかしてあのオカマ…大原のせいか」

だとしたらなんでコイツは女にならない？

「彼女はすばらしい。私の性癖を蔑まずこうして理想の姿へと導いてくれた」

「理想の姿！？」

そう言えば尾藤は巨乳を欲して自分になった。堂島もアニメ風美少女に。

（こいつはもしかすると…）

本来の目的である抗議を忘れ一計を案じる秋津。

この日の最後の授業はロングホームルーム。

新たに少女となった三人が紹介されていた。

恐怖する不良たち。だが反面その明るい少女たちにあこがれるものもいた。

秋津はどちらでもない。自信満々な笑みを浮かべている。

「それじゃみんな。彼女たちとも仲良くしてね」

乙女がその透き通る声で言うアニメ風美少女。小学生女児。和風少女はぺこりと頭を下げた。

「せんせーよー。一つ聞かせてもらえねーかな？」

「何かしら？ 秋津君」

「せんせーはさ。どうしてその姿になったんだ？」

先生と呼んではいるが単に話を円滑に進めるためだけの目的で敬意などこもってない。

そして彼は乙女から聞きだして自分の仮説の裏づけをしようとしていた。

「そうね。それもいいわね。それじゃ話してあげる。あれは私がみんなくらいのころ。まだ男の子だったころよ」

乙女は遠い過去を思い出して語り始める。

高校二年の乙女。このころはまだ男で大原修おおはら おさむと言う名の男子。そして「不良」だった。

背はさほどではないが男前。リーゼントがびしつと決まっていた。

修が従うのは自分だけ。自分の掟にのみ忠実だ。

納得が行かなければやらない。それが掟だった。

衝突したら場合によっては潰す。その対象は同類である不良に限らず何人もの教師を撃退していた。

ある日の事、今は女教師として通うこの学校で喧嘩をしていた。

腕っ節の強さは校内で知らないものはない。誰も彼を恐れて近寄らない。

彼自身もそれを勲章と考えていた。

そしてその腕前を聞きつけ倒して名を上げようとするものも少なからずいた。

それを学校で迎え撃ち「公開処刑」するのがある種の趣味と化していた。

この喧嘩ではエキサイトしすぎて相手を殺しかねないところまで追い込んでいた。

誰もが「むごい」と思っていた。しかし頭に血の上った修に意見するなど死に行くようなものだ。誰も行かない。

ところが一人の老人が修の繰り出したパンチを受け止めた。

そしてその勢いを利用して修を投げ飛ばした。

「ギャラリィ」の前で仰向けになってしまう修。

見物人の中には修に反感をもつものもいたので「無様ね」と笑われる始末。

「ほれ。立てるか？」

当の老人は処刑されかかっていた学生を助け起こしていた。

小柄な老人だった。髪は真っ白で中国をイメージさせる衣類を身に纏っていた。

「てめえつ。何のまねだ！？」

「お前さんこそなんのつもりじゃ？ 勝負ならついていたであろう。その若さで外道に落ちたいか？」

「てめえが地獄に落ちろ」

近寄ると問答無用で蹴りを見舞う。いわゆるヤク：ケンカキックだった。

しかし老人はそれをかわすと起き上がりつつ「背中」で脚を払う。「わわっ」

当然転ぶしかない。二度までも恥をかかされた。修の心が殺意で満ちる。

怒りのままに攻撃をするが一撃も当たらない。

「そんな攻撃では百年経つても当たらんわい。惜しいのう。いい物をもっているのじゃが」

「ぬかせえつ。ぶっ殺してやる」

今の乙女からは想像出来ないほどさんだ言葉遣いの修。しかしとうとう当てる事が出来ず、先にやってたケンカの疲れもありばててしまった。

「ひよほほ。そろそろ暑くなると言うのにタフな奴じゃ。一発ですむところをこれだけ繰り返すんじゃないからな」

「ば…ばかに」

もう口も利けない。喉がカラカラだ。

「ひよほほ。よかるう。暇つぶしにお前を鍛えてやろう。獣の拳ではなく、人の拳へと導いてしんぜよう」

「て…てめえ…何もんだ？」

「通りすがりの憲法家じゃよ。覚えておきなさい」

それから「修行」が続いた。

と言つても修がしたかうはずがない。彼がとにかく拳を繰り返し、通りすがりの拳法家：「老師」が避けるだけだ。

しかしこれがまったく当たらない。いつしか修の攻撃は無駄がそぎ落とされ洗練されて行つた。

「そうじゃ。女人のごとく振舞え。女は非力じゃからな。その動きを真似れば無駄な力を使わずにすむ」

「るせえっ」

怒鳴りつつも知らず知らず最短距離に行くようになり、動きが小さくなって行つた。

対立は続くのだがいつしか修は老師を崇めていた。

不良と忌み嫌われ両親すら見放した彼に対して、ここまでつきあってくれたその心に彼も心を開いたのだ。

拳で語りあっていたのである。

さんざんにやりあいそれでも一撃をくわえることが出来ない。

とうとう修は音を上げて強さの秘密を尋ねた。

「柳に風」

それが返答だった。

「なんだよ。それは？」

「どんな荒れ狂う嵐とてやんわりとした柳の枝は折れぬ」

「……そうか。俺はあんたに勝ちたい一心でひたすら打ち続けていたがそれはすべて流された」

「壁に拳をぶつけければ拳は痛むし、壁も痛む。だが包みこまれば誰も痛まない。そして攻撃をやめさせる目にはそれで充分」

「老師」はそつと修の手を両手で包みこむ。

（暖かい。なんて優しい手だ。俺の手は人を殴り続けて荒れているのに。本当に強い人間の手はこんなに優しいのか）

修の中で何かが変わる。

「修よ。包みこむ大きな心を持て。強いものとは優しいものだ。さあ。生まれ変わった姿を思い浮かべてみよ」

言われるがままに目を閉じてイメージして見た。

全てを包みこむ、優しい自分を。

それは女だった。小さな動きの、そして敵意を微塵も感じさせない笑顔の女だった。

（これが……俺の求める姿？）

最初に感じたのは胸。そしていたるところから違和感を覚え彼は目を開けた。

「な、なんだあつ？」

背が縮みはじめている。

逞しい肩は優しげなで肩に。

厚い胸板は優しい二つの膨らみに。

割れた腹筋を要する腹部はなだらかに変わりくびれて行く。

もともとしっかりした腰だったが、安産体型へと変わる。

太い腕は華奢な細腕に。足も細くなる。

肌の色が健康的な白になり、顔つきは優しげな女のものに。

リーゼントの前髪がさらさらと落ちる。

後ろ髪が異様なスピードで伸び、やや明るい色の癖ツ毛が背中 of 辺りまで達する。

服装も男子学生服がボレロに。

ワイシャツがスクールブラウスに。

ズボンが一番大きく変化してジャンパースカートになる。

革靴もローファーに。

「これは無限塾の（女子）制服…何だよ？ この声？」

声も透明な女声になっていた。

修は女子高生へと変化していた。

「ほほう。なるほど。女人か。それも道理」

「し…師匠。どうしてこんな風に？」

口調まで女性的になっていた。

「うむ。確かに女の大きな愛の前には男の猛りなど無意味。修。お前は男と言う粹すら飛び越えたのだ」

「すると…この姿は私の理想と？」

老師は頷いた。そして修だった少女は喜びの表情へと変わって行く。

「ああ。私は荒れ狂う獣から人になれたのですね。老師。お導きありがとうございました」

歡喜の涙を流しつつ手をとって謝意を示した。

「うむ。それほどのことをなしたお前だ。同じように道を踏み外した者たちを導くことも出来るじやろう」

「はい。やります。私、先生になります。そして不良生徒たちを更生させていきます」

「人生の目的が見つかったか。門出に新しい名前を与えよう」

少女を改めて見る。男性的な部分がまるでない。それで思いついた。

「よろしい。お前は今日から乙女。大原乙女だ」

「はい。ありがとうございます。大原乙女。教師を目指します」

「それから猛勉強して何とか先生になれたのよ。そして今はここにあります。どう？ 参考になったかしら？」

まさか自分自身を変えていたとは。それでは他者などなおさら簡単に変えられそうだ。

不良たちは恐怖する。秋津をのぞいて。

「ああ。なったぜ。あんたの『魔法』の秘密がよくわかった」

不適な笑みを浮かべる秋津。立ち上がり乙女を指差す。無礼だが『謎解き』のお約束なのでやった。

「あんたは自分でも気がついてなかったが何かの能力者だ。それを最初に自分に対して発動させた」

探偵もののクライマックスで犯人を暴く気分の秋津は口も滑らかに「魔法」を謎解きして行く。

「どこかで読みかじったが人間には理想の異性が心にあるのかな。アミバだったか？」

男性の場合はアニメ。女性の場合はアニメスである。

「あんたの『能力』は心に潜む理想の人物と現実の自分を入れ替えることだ」

大原乙女のスタンド・ストレンジャー

破壊力 - なし スピード - なし 射程距離 - C

持続力 - A 精密動作性 - B 成長性 - なし

能力：現実の自分と心の中の理想の異性に入れ替える。
そのため男が女性化した場合はいきなり女性的になる。
また理想を反映させているので美人が多い。

A - 超スゴイ B - スゴイ C - 人間並み D - ニガテ E - 超ニガテ

「すっごーい。そうなんだあ」

手を叩いて喜んでいる乙女。拍子抜けする秋津だが勝利宣言が残

っている。

「だがその『魔法』は俺には通じないぜ。前の担任が女にならなかったことで証明されている。俺の心にはいつも憧れのあの人がいるからな」

ここで秋津は最高に気持ちよく憧れの存在。『伝説の不良』の話をした。

クラスメイトの大半は「またか」とうんざりしている。

乙女は興味深そうに聞いていたが

「あら。懐かしい。そんなこともあったわねえ」

「へ？」

なんだと？ このリアクションはどういうことだ？

「それじゃあの時の自動車にあなたがいたの？ 病気は大丈夫だったみたいね。こんなに立派になったんですもの」

「ま…まさか…」

天国から地獄。

「ええ。それ私みたいね」

ぴしっ。秋津の心に輝が入る。

大事にしてきた思い出を破壊された衝撃は測り知らない。

（う…嘘だろ。俺が髪形を真似るほどあこがれた『伝説の不良』が『オカマ』に…）

秋津は現実を直視出来なかった。

現実逃避と妄想の中間を漂い続ける。

そして秋津は泣きたいと思っても泣けなかったので、考えるのをやめた。

「どうしたの？ 秋津君。ぼーっとして」

「……先生。そっとしてやってください。今はそれが優しさだと思います」

千鶴の言葉がクラスの総意だった。

次一回。

秋津のこの手が真つ赤に燃える。

果たしてこの衝撃から立ち直れているか？

Lesson 2「魔法先生オトメ」(後書き)

あとがき

『ゴッドフアザー乙女』のLesson 2です。
起承転結の『承』で。

不条理ではありますが女性化の原理などに理屈付けで。

今回はパロディが暴走気味(笑)

メタ発言も増量とんでもない展開に。

けどこの作品に関してはかなり制約がゆるいのでやっちゃいました(笑)

冒頭の『高岩せいら』は言うまでもなく『戦乙女セーラ』のそれ
で。

EPISODE 40『少女』とリンクさせてあります。

とはいえセーラを書いていた時は『GFO』は構想すらなく、完全に後付けですが。

このリンクが構想にあり、季節は同じ秋ごろの設定になってます。

乙女を鍛えた師匠は当初は「機動武闘伝Gガンダム」のマスター
アジアのイメージでした。

しかし受け流すタイプと言うこともあり飄々とした人物に変更。
それにマスターはファンも多いので余計なトラブルを避けて。

秋津のあこがれた「伝説の不良」が実は乙女の変身前と言うのは
ある人のアドバスを受けて。

この場を借りてお礼申し上げます。

劇中にある通りネーミングはアルファベットで。

それでは「ゴッドファーマーザー乙女」Lesson3「ハンター・ミッション」でお会いしましょう。

お読みいただきましてありがとうございます。

城弾

おまけ パロディ原典集

サブタイトル

今回は「魔法先生ネギま」から。

ゴッドファーマーザー乙女。 前回の三つの出来事ゝ 現在、少女になった少年は…

「仮面ライダーオーズ」（以下オーズ）の前後編の後編のときに前編を振り返る時のパターンから。

「はい。あたしが高岩せいらです」

「戦乙女セーラ」#39で主人公のセーラは完全女性化。そのため女子として登校した。そこで遭遇した。

全部パンチ

「ハートキャッチプリキュア」での必殺技。

「あああああんまりだあああああつ」

「ジョジョの奇妙な冒険」(以下J.O.J.O)第2部に出てきた敵。エシデシは怒る変わりに泣き喚いて心をすつきりさせる。

ちなみに腕を切断されての叫び。

「な、何だ。コイツ。血管びくびくで怒ってくるかと思いきや予想外つ。怒るより逆に不気味なものがあるぜ」

上記の場面でエシデシと戦っていた2部主人公。ジョセフ・ジヨースターがつぶやいた台詞から。

「ええ。その欲望。解放しなさい」

オーズに出てくる敵。グリードは人間の欲望を元に怪人^{ヤミー}を作り出す。

グリードの一人。ウヴァがその際に言う台詞が「その欲望。解放しろ」

「にゃ、にゃあ?」

該当は多数あるがこの場合は「迷い猫オーバーラン」の霧谷希。

「にゃあ」は口癖。

「な、なんかこの声で二つお下げだとバンドのサイドギターって感じがするよ」

ツインテールのサイドギターは「けいおん!」の中野梓。主人公からは「あずにゃん」と呼ばれている。

「くそうっ。堂島の女体化がこんな可愛いわけがない」

ライトノベル。そしてそれをアニメ化した作品「俺の妹がこんなに可愛いわけがない」

霧谷希。中野梓。この作品のヒロイン。高坂桐乃の声はいずれも竹達彩奈さん。

「こ、これが俺？」

TS物の定番台詞（笑）

「すばらしい。新しい堂島君の誕生よ。Happy Birthday
ay。おめでとう」

「オーズ」鴻上会長の台詞から。

ちなみにオリジナルは「ハピバースデイ」と言う感じの発音だが、乙女が英語教師と言うこともありここは英語で。

自分が被害にあわなかったからか皮肉を込めてあちこちから「おめでとう」の声と拍手が。

「新世紀エヴァンゲリオン」テレビ最終回の場面から。

（逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ）

「新世紀エヴァンゲリオン」の主人公。碇シンジの台詞から。

「たーん……とう……ばっく……たー……と……たっ……とっばっ。たとばたとばっ」

「オーズ」の基本フォーム。タトバコンボ成立時にはこの歌が流れる。

「……歌は気にするな」

オーズ第一話で流れた歌に疑問を口にした主人公に対して言われた台詞。

「えいつ。ウルトラタッチ」

「ウルトラマンA」で男女二人が指輪を合わせることで変身する。その時の掛け声が「ウルトラタッチ」

「いや。それはわからないからどちらかと言うと『でてこい！ シヤザーン』の方が」

海外アニメ。「大魔王シャザーン」で主人公二人が大魔王を召還する際に指輪を合わせ「でてこいシャザーン」と叫ぶ。

秋津の思い出話

JOJO4部の主人公。東方仗助の思い出そのまま。

「プリンだぁー。けっ。俺は不良だぜ。プリンなんて女子供の食うものは……」

JOJO4部。イタリアンレストランでのエピソードの締めくくり。

結局は美味しい物を食べて健康にまでなった虹村億康の台詞から。

ちなみにこれで水虫が治っている。

「ったく。ガキの高校生なんてどこの飛び級だよ」

該当作は割りとあるがこの場合は10歳と言うことで「あずまんが大王」から。

主要人物の一人。美浜ちよは10歳にして高校生へと進級した。

「絶望した！　しょーもないことで性転換することに絶望した！」

「さよなら絶望先生」主人公。糸色^{いとしき}望^{のぞむ}の決め台詞とほぼ同じ。

余談だがこの迷セリフの初出は『絶望先生』ではなく、前作である「かつてに改蔵」でヒロイン（笑）名取羽美^{なとりうみ}が発した物が最初。

・古い薬とく・人体実験で…

上記「さよなら絶望先生」及び「かつてに改蔵」で頻出する「羅列ネタ」

そのエピソードのテーマにあった事例を並べるギャグ。

以下は全て城弾作品から

・古い薬と肺炎で性転換

「Panic Panic」の赤星瑞樹は中三のときに肺炎になりかけてもうろうとした状態で飲んだ薬が十年以上前の物で、それを複数のだのと肺炎と本人の体質が合わさり、回復した時は30　以下の水を被ると女になる体質になっていた。

ちなみに「らんま1/2」に対するリスペクトなのでこの設定。

・服に着られて性転換

「着せ替え少年」の二村司は流されやすい性格で、着た物に合わせて性格が変わる。

女性服だと性転換までしてしまう。

・太古の遺恨で性転換

「戦乙女セーラ」の高岩清良。伊藤礼。押川順は前世では戦乙女と呼ばれる少女だった。

・放射線で性転換

「ボーダーレス」のこと。太陽光線の異常で1999年7月のある日に日光を浴びたものは性転換してしまった。

全世界の四分の一が性転換したため元・男の女や元・女の男のために男女の垣根が無くなった。

・指輪はめたら性転換

「Made of Fire」のこと。

マッドサイエンティストの実験で女性化。

なおこの話は読者投票で次を決めるという展開であった。

・子宝の湯に浸かると性転換

「湯の街奇談」及び「湯の街余談」

秘湯である「子宝の湯」は正常な妊娠出産を出来る体にしてしまう。

女性が浸かれば健康になるなどメリットは多大だが、誤って男性が浸かったりすると女性化する。

効力を無効化するには出産しかない。

・墓参りすると性転換

「美少女組長奮戦記」の銀次郎は殺された妻の墓参りの最中に少女になった。

亡妻が夫をやくざでいられなくするためにした。

・大ぐらいだと性転換（巻き添えあり）

「同居人」の北原素直の食欲を抑えるべく主人公が妹に頼んだら小食な少女に変身させられた。

後に主人公。誠治も女性化され女二人の同居に。

・酔っ払うと性転換

「とらぶる すぴりっつ」の主人公。酒井真澄は先祖がかけられた呪いのせいで酒に酔うと女性化した上に淫乱になる。

酔いが醒めて男性精神に戻るとはげしく後悔するのが定番。

・人体実験で性転換…臨床実験といいなさい。

「アンテナシヨップ」では性転換実験の一部で社会に適應できるかの実験としてメイド喫茶を経営していた。

『臨床実験と…』とは前編の国近たまきの台詞から。

「破壊からしか再生は出来ないのよ」

「仮面ライダーディケイド」（以下DCD）第一話での紅渡のセリフから。

「やはり決め台詞は『二回死ね』よね」

「迷い猫オーバーラン」のヒロイン。芹沢文乃の口癖は「二回死ね」

「秋津……やらないか？」

とあるマンガのホモネタで誘いをかけている場面のセリフ。

元ネタは山川順一なる漫画家の作品と聞くが、ネットスラングとして定着しており、筆者もそちらでとった。

いわゆるヤク…ケンカキックだった。

プロレスラー。蝶野正洋の繰り出す前方へのキック。

やくざキックが本来の名前だがイメージの悪さでかテレビではケンカキックと呼ばれてる。

見物人の中には修に反感をもつものもいたので「無様ね」と笑われる始末。

『無様ね』は新世紀エヴァンゲリオンのセリフから。

「通りすがりの憲法家じゃよ。覚えておきなさい」

「DCD」主人公。門矢士^{かどやつかさ}の決め台詞。「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えとけ」より。

無限塾女子制服

上記「Panic Panic」の舞台である高校の名が無限塾。

その女子制服がジャンパースカートに上着と言うもの。
これも「らんま」へのリスペクトで同タイプにしてある。

「どこかで読みかじったが人間には理想の異性が心にあるのかな。
アミバだったか？」

アミバとは「北斗の拳」に登場した悪役。
主人公・ケンシロウの義兄。トキに成りすまして悪事を行っていた。

ちなみに投稿雑誌「Fanroad」のシュミの特集に無関係なのに毎度乱入と言うのが定番化している。

大原乙女のスタンド・ストレンジャー

スタンドとは一言で言う超能力に映像が伴ったもの。「J O J O 3部」からの概念。

この表は5部を収録した単行本から掲載されるようになった。

秋津は現実を直視出来なかった。

現実逃避と妄想の中間を漂い続ける。

そして秋津は泣きたいと思ってもなけなかつたので、考えるのをやめた。

J O J O 2部のラスボス。カーズは究極の生命体アルティメット・シィングになつたものの火山の大噴火によって大気圏外に追放された。

地球に戻れず死ねない肉体なので思考を停止した。
その時の末路をつづった文章から。

次一回。

「海賊戦隊ゴーカイジャー」の次回予告時のナレーションから。
「カーレンジャー」のパターンを踏襲して最初の一言を伸ばすのが
パターン。

秋津のこの手が真っ赤に燃える。

「機動武闘伝Gガンダム」のドモン・カッシュのゴッドガンダム搭
乗時の決め台詞。

「俺のこの手が真っ赤に燃える」から。

ゴーカイジャーのナレーターとドモンは同じ関智一さんが声を担
当。

Lesson 3 「ハンター・ミッション」

雪の降る日。彼のヒーローが現れた。

男が命の次に大事にしているであろうガクランをぼろぼろにして自分を助けてくれた男。

「ま、待ってくれよ」

その「男の子」はあわてて車から駆け下りて雪道を走って『彼のヒーロー』を追いかける。

いつの間にか男の子は背の高い『不良』の姿に。

そして似たような姿の男に追いついた。後ろから抱きつく。

「やっと逢えたな。オレはあんたに懂れてこの学校に進学したくらいなんだ」

胸の内を吐露する秋津明義。だが彼は違和感を感じた。

「……あんた、随分といい匂いがするな？」

この甘い香り。まるでこれは……

「それに……なんだかやたら柔らかいし」

抱きしめた感触は筋肉のヨロイではなく、まさにマシユマロのよくな柔らかさ。

嫌な汗が出る。冷や汗。脂汗が混じったような。

「……………」

男にはありえない感触に彼はますますひどい汗をかく。

「女の子は柔らかくていい匂いがするものなのよ。秋津くん」

鈴を転がすようなきれいな「女の声」がする。この場合その耳の心地よさが秋津にとっては悪夢だった。

いつの間にか「大原修」が「大原乙女」になっていた。

「うわああああああっ。て、てめえっ。いつの間にすりかわった？」

「私は生まれ変わったのよ。そして秋津くん。あなたもね」

「えっ？」

秋津は頭ひとつは上のはずなのに気がつく乙女と視線が同じ高さに来ていた。

ずしつと胸が重くなる。胸が膨らんだのにくわえ、非力になったのが何故か実感できる。

髪の毛が爆発的に伸びふわふわの印象を。

手足は華奢になり肌の色は輝く白に。

衣類も白とピンクのワンピースに。フリルだらけで乙女チック。

「あああああ。男の中の男になるはずのオレが」

スカートの上から股間をまさぐるがまったいら。

反対に胸元はやたらに盛り上がり腕の邪魔。

服だけでなく肉体も少女になっていることを突きつけていた。

「あなたは私に憧れていたんでしょ？　そして追いかけていたともだから私と同じになるの」

「いや……なんかじゃないですつ。乙女先生」

不良学生の面影はまったくくない。そこにいるのはうら若き少女。

むしろ姫と言いたくなる高貴さをもっていた。

「先生。ありがとうございます。私も先生と同じ女になれて嬉しいです」

（な、口が勝手に。オレがこんな女になるはずが）

まだ心では男の心が抵抗を続けていた。

「とても可愛いわ。あなたにも女の子の名前をつけてあげましょう」

「嬉しいですわ。先生（やめる。女の名前なんてつけられたら心まで女になってしまう気がする）」

その思いに反して乙女は即決で女の子の秋津の名前を決めた。

「愛の夢で愛夢ちゃん。ううん。ちゃん付けより愛夢姫とでもよびたいわ」

「まあ。素敵なお名前。はい。わたくし必ず立派な姫になりますわ」（違う。女になんてなりたくないのに。どうしてオレがこんな目に

！？）

入れ替わって心の奥底に押し込められた秋津明義の絶叫は誰にも聞こえない。

ただひたすら優しい微笑をかわす二人の女がいるだけだ。

教育と更生を求めて学校を渡り歩く一人の女。

不良達のつけた「ゴッドファーザー」の二つ名を名乗る爽快な女。
その名は……

ゴッドファーザー乙女

Lesson 3 「ハンター・ミッション」

「うわあああああつ」

一月末のある日。秋津は教室の机で跳ね起きた。教室の中にあるもの達が一斉に注目するがすぐに興味を失う男と深入りする女。対照的であった。

現在は昼休み。校庭で遊んだりせず教室の机で居眠りしていたのだがこの有様。

「ゆ、夢か。なんつーシャレにならない夢を」

脂汗は本当だった。

「どうしたの？ 秋津のお兄ちゃん」

小学生の女兒。江原エリが下から覗き込む様にみていた。

「顔色が優れませんよ」

和服姿の福本文乃がおつとりと言う。

「べ、別にあんたの心配なんてしてないんだからねっ」

パステルカラーだらけで目が痛くなるのが堂島だりあ。

ピンクのツインテールがアニメキャラじみている。

そのせいなのか「ツンデレ」を演じているようだ。

いずれも元は不良男子だったが乙女によって現在の姿になっている。

「なんでもねーよ。あっちにいけ」

元・男と言うこともあり邪険に扱う。

「あー。ひつどーい。女の子に対してそんな言い方」

だりあのつきぬける甲高い声が秋津の脳天を直撃する。

「お兄ちゃん…私が何かしたなら謝るから。だから怒らないで」

半べその小学生女兒に上目遣いで謝られたらいくら不良でも心は痛む。

「まあ。御機嫌斜めですのね」

そしてやや場違いな大正娘。あまりの不ぞろいさもあり秋津はきれた。

「いいから消えやがれ。オカマどもっ」

「ふーんだ。言われなくても消えるもん。ねえみんな。聞いて。秋津がひどいんだよ」

「えー。なにになに？」

「だりあに何かしたの？」

だりあがアピールした先には7人もの女子が。その『ひどい現実』を再認識して秋津はげんなりとする。

（あれから5人がさらに変えられたしなあ。そりゃあんな夢も見るか）

20人の爪弾き者で構成されたZ組。不良クラスと言われているのはもはや昔。

男子校の中でクラス半分の十名が女子で「共学クラス」と言われ

る始末。

（キレイ過ぎて居心地悪いぜ……）

言葉どおりだった。

元・不良の少女達は「理想の姿」のせいかとにかく女性的であった。

そして女性に抱くイメージのひとつ…「清潔さ」が教室に反映されていた。

汚かった教室がすっかりきれいに、そして明るくなった。

常に花瓶には花がいけてある。

そもそも「女の子がいる」それだけで場が明るくなる。

例え元は男達でもだ。

「しかし…あいつらがみんな元は男とは信じられないぜ」

教室の隅っこでライオンのたてがみのようなぼさぼさ頭の財津全次郎がつぶやく。

「これもみんなあのオカマが悪いんだ」

歯噛みするのは秋津明義。二人は女子の一団を眺めていた。

「後楽高校に王真。百紀。とうとう作者の分じゃ足りなくて『ロボTRY』での制服まであるぜ」

そのせつはお世話になりました。

「しかもしょーもないことばかりで変身してやがる。権藤の奴はあのオカマがレディースデイで映画を見ているのを『女は安くついていいな』とからかったら女子高生になったし」

「権藤源太郎が銀河のアイドルになれと権藤銀河と改名だしな」

「変身した時も変なこと叫んでいたよな。『宇宙キターツ』とか」
銀河と言う名前のせいらしい。

風貌の方は映画女優と言うことなのかカールの強い茶髪。派手な女になった。

ちなみに「地毛」と認められて校則違反は問われない。

「堀川の奴はそのアイドルの写真集を見てたらそのまんま憧れのア

アイドルの衣装になったしな」

堀江久改め「堀江ほのか」である。愛称・ほっちゃん。腰に達する艶やかなロングヘアが魅了している。

ちなみにこの名前はだりあが乙女に進言したものである。

「飯塚の奴は出来のいい弟にコンプレックスもってて『兄より優れた弟なんざいねえ』と吹いていたら『妹』になっちまった」

肉体年齢13歳。三つ編みがチャーミングな少女である。

内心では弟を認めていたのか「妹」になった途端にブラコンになった。

名前も功から育美となった。

「いっちゃんワケわかんねーのが十文字じゅうもんじと北川だ。逃げたのいいが女になって帰ってきた」

十文字じん仁。北川浩二の二人揃って「どうせ逃避行なら女の子と逃げるほうが」思っていた。

そして逃亡の際に二人の足並みが揃わず思わず「どうせならてめーも女だったら少しはやる気になるのに」と互いに主張したら揃って女性化した。

女性化を嫌っての逃亡である。なってしまったなら逃げる意味はないと戻ってきたのである。

しかも互いに相手の願いを叶えた形。

「元・男の現・女同士でラブラブ」とホモなんだかレズなんだかわからない展開であった。

そしてこの時点でやはり二人でいちゃついていた。

「樹里……このみ……」と熱い視線を絡ませあっていた。手もいわゆる恋人つなぎだ。

ちなみに私服になると樹里は黒。このみは白のゴスロリ。

これも互いの好みと自分の好みが一致したためエスカレートの一途をたどっている。

さらにだりあにそのかさされて出向いた池袋で「BL」にはまり、腐女子への道を歩んでいる。

『道ならぬ恋』が自分達にダブってしまったらしい。

「やべえな」

「ああ。逃げてムダ。おとなしくしててもダメ。このままじゃ全滅だ」

もちろん女性化を意味している。それを秋津は危惧していた。

「だから手をくまねえか？」

第三者・松田元紀が声をかけてきた。

高校生だが髭を蓄え老けて見える。顔つきも悪人ヅラだ。

「ああ。てめーとオレがか？ ふざけんな。タイマンないつでも応じてやるぜ。もっともまたオレが一方的にぶちのめすだけだな」

淡々と言う。傲慢と言うより事実を並べただけ。

「ああ。オメーの強さはやりあつて身に沁みたぜ。だからこそ手を組みてえ」

一理ある。秋津は話を聞く気になった。

「組むつて…なにをするんだよ？」

胡散臭そうに秋津は尋ねる。もっともだいたいの予想は出来ている。

「決まってるんだろ。あいつをやるんだよ」

低い声で松田は答える。

「なに？ 殺るのか？」

「ああ。姦るんだよ」

「……………」

両者の間に溝を感じた財津は「面倒はごめん」とばかりに立ち去った。

どこか不機嫌そうに秋津はつき合う。

「話は聞いてやる。三行で説明しろ」

「大原の帰宅ルートを調べる。」

人気のない所に出たら大人数で押さえつける。

そしてあとはやりたい放題。

城弾は新作を書いているらしい」

「三行でって言ってるんだろうよ。しかもなんだ最後のは？ 全然力
ンケーねーじゃねーか」

何故かやたらに怒る秋津。

「そこまで怒るか？ まるで序盤はヒロインだったのに後半は完全に壊れた『早すぎたヤンデレ』の女性キャラみたいだぞ」

「知るか！ オレは北海道のどつかにあるレストランで日本刀腰にぶら下げつつウエイトレスをしている奴くらい穏やかだ」

秋津なりのユーモアで返す。

「ところでよ。タイマンじゃねーのかよ？」

「力づくでやった結果があれだろうよ」

松田は視線を向ける。その先にはファッション雑誌を熱心に見ているポニーテールのセーラー服少女。近田千鶴だ。

元はパワーファイターだったのに今ではすっかり普通の少女である。

「大人数でやるのか。気が乗らないぜ」

男なら一対一。そう信じる秋津の信条に反していた。

「そうか。それなら構わんさ。お前にしても大事な英雄があんな姿になったのを我慢出来ないと思ってたんで声をかけたんだが」

「！？」

その一言が殺し文句だった。

秋津の憧れた「伝説の不良」はいまや物腰柔らかな女教師。

いわば「乙女」に「修」は奪われた形だ。

それを認識したら怒りが沸きあがってきた。

「待てよ。松田」

背後から肩をつかむ。松田がやたらにのろい歩き方だったのはこれを見越していたとは思えない。

その証拠に振り返った顔はニヤついていた。

「なんだ？ 気が乗らないんじゃないのか？」

「気が変わった。俺も参加するぜ」

そうだ。これは復讐だ。秋津は昏く燃えていた。

にやりと笑う松田。何か裏がある笑いだ。秋津は気がつかない。

そのまま松田はなれなれしく秋津の肩を「わざとらしいほど親しげに」抱いて言う。

「よし。それじゃお前もこの大原を『狩り』に参加だな」

（狩り…か。確かに大人数で一人を狙うのは喧嘩とかじゃなくて狩りに近いな）

秋津は軽く嫌悪感を抱いたが「復讐」の心が上回った。静かにうなづく。

「それじゃハンター・ミッション。打ち合わせといこうか」

襲撃メンバー…ハンターは秋津を含め六人。

リーダー格。むしろ「主犯格」と呼びたい松田まったく元紀

参加者は沼田ぬまた典也。乱橋竜太郎。進道宗一。戸村哲郎。

そして秋津明義で六人。

決行は三日後。木曜の放課後とされた。

（待つてろよ。カマやろう。てめーなんざオレのあこがれたあの人じゃねえ。だから遠慮なくぶちのめしてやるぜ）

そう意気込んで見せるがどこか乗り切れない。

自分で自分をだまそうとしてそれが出来ない。

（くそつ。なんでこんなにすつきりしないんだ？）

もやもやがさらにイライラを加速させる。

翌日。一時間目のロングホームルームが終了した。

以前と違い大半が乙女に対して従順な女子に変わりきちんと着席している。（ただし服装だけはてんでんばらばら）

一方「まだ」女性化してない十名も下手に逆らって女にされてはたまらない。

逃亡した二人はレズカップルへと変貌したのでその考えもなく現時点では静かにして聞いている。

（レズカップルに関しては両者の思考の問題も多大にあるが）

ただし襲撃を目論んでいる面々は「いい氣にしてられるのも今の内だ」と言う思いを秘めていた。

だが秋津は違っていた。

教室から去ろうとした乙女に秋津は廊下で声をかけた。

「なにかしら？ 秋津くん」

軽く首をかしげて可愛らしい笑顔。

本当に元・不良。そして男とは思えない柔らかさ。

「いや…最近この辺りには痴漢が出るらしいぜ」

「痴漢ですって？ 女の敵よね」

いきなりわって入った尾藤美優。

「てめーもちよつと前は似たようなもんだつたらうが」

乙女に女性化させられた一号である美優は元々はスケベ少年の尾藤蛮だった。

乙女の胸を欲したら自分が巨乳娘になってしまったのである。

それに話の腰を折られてむっとした調子で言う秋津。

「あたしも何度が触られてそれがいかに嫌なことかわかったわ。ほんと。男って最低」

元・男だから男を嫌うのはまだいいが、この場合は完全に女性としての憤りだ。

「尾藤さん。ちよつと違うかな？」

「何がですか？ 先生」

「最低なのは男の人じゃなくてそう言う悪い心。心の弱さなのよ」

「へつ。罪を憎んで人を憎まずってか？ 立派なもんだ。とにかくよ。そのムダにだけーおっぱいもまれたくなかったら人のいない所を歩かない方がいいぞ」

言うだけというと秋津は背を向けた。

「なによあいつ。悪態ばかりついて」
憤慨する美優。

「いいのよ。あれが彼の優しさなのよ。ただ照れくさいだけ。男の子ってそう言うところがあるみたいだから」

「わっかんない」

もはや両者とも最初から女として生を受けたかのような発言だ。

一方。秋津は

（あー。何やってんだオレ？　なんでわざわざ襲撃を逃れるようなことを言うんだ？）

人知れず頭を抱えていた。

（あいつは憎い相手だろう。オレから大事な存在を奪った女）

ここだけだと三角関係のもつれにしか聞こえない。

（それをなんで…自分で自分がわからねえ）

秋津は目をそむけていた。

乙女が憧れた存在のたどり着いた姿と言うことから。

男の中を目指した男が女の中の女に。その変貌を認めなくなかった。

しかし乙女がかつて憧れた存在であることは直感で認識していた。この二人の出会い。そして「再会」も運命的だったのだ。

襲撃予定の木曜日。

調べた結果、乙女は帰宅前に商店街に立ち寄り買い物をする。

商店街に入る前に乙女は理由は不明だが河川敷を通る。そこで待ち伏せとなった。

少しずつ春めいているとは言えどまだまだ寒く、そして日が落ちるのも早い。

六時ともなると子供達もみんな家路につく。

現在は襲撃チームが控えているだけだ。

「こんなところでやるのかよ？」

喧嘩ならともかく「婦女暴行」を目論んでもいる。

人気はないが叫ばれたらたまらない。

「こんなところだからいいんじゃないか。輪姦されたのがモロわかりだよ。『乙女』としちゃ恥ずかしくて生徒に顔なんか向けられねーぜ。ひやははっ」

（卑劣な奴だ。不良にも不良の「仁義」ってものがあるだろう）

それもあり秋津はこの松田を気に入らず衝突している。

「おい。きたぞ。大原だ」

「よし」

見張り役の進道から声をかけられた松田は携帯電話で通話を開始した。

数分後。三人の男が現れた。

「誰だ？」

「ちよつとつてがあつてな。帝江州組のメンバーに」

「ま。うちのガツコのOBでもあるがな」

「偉大なる先輩と言うわけだ」

（やくざだと？）

不良がアマチュアならやくざはプロ。そんなやつらまで引っぱり出したのか？

秋津はこの自分の手を汚さないやり方にも憤りを感じた。が。

三人の男と鉢合わせした乙女を目を見開いている。

その三人の男は下卑た笑いを浮かべている。

「おお。なんだ。きれいなねーちゃんじゃねーか」

キャップを被ったピアスの男が言う。

「いい舎弟を持ったな。黒須」

パンチパーマの男が隣に声をかける。

「ああ。元紀の奴。いい女だからちよつと一発やってくれなんていつてたが、コイツは確かに上玉だぜ」

黒須と呼ばれたそりこみの男が笑顔だ。

三人とも二十代後半くらい。揃って目立つ位置にタトゥー…刺青をいれていた。

乙女は恐怖してない。ただ驚いている。

「イガちゃん。クイーン。えっちゃん。久しぶり」

「え？」

戸惑ったのは三人の男だけではない。襲撃チームもだ。

「こいつらと大原は」

「以前にもであっているっ」

「こいつらとの間に何があったのかッ」

さらに戸惑わせる三人の男のリアクション。

「お前：もしかして修か？」

「今は乙女よ。大原乙女。えっちゃん」

「やっぱり。オレだよオレ。黒須越楠^{えつくす}」

「俺のことも覚えてるか？」

「もちろんですよ。クイーン。杭頭九院^{くいずくいん}。そして五十嵐五十雄。イガち

やん。懐かしいわ」

「おおーっ。大原。久しぶりだなあ。女子高生がすっかりいい女じやねーか」

「うふふっ。今は先生なのよ」

「マジか!？」

「ええ」

「信じられないなあ。昔はよく一緒につるんで悪さしたけどな」

「もう。恥ずかしいわ。あのころのわたしはやんちゃだったから」

「相手の高校に乗り込んでいきなり窓ガラスを割って回ったりもしたっけ」

「恥ずかしい…もう生きてはいけませんわ」

頬を押さえる乙女。完全に和んでいる。むしろプチ同窓会。

啞然としている襲撃チーム。

「どういうことだ？」

完全に目論見の外れた松田がつぶやく。

「もしかしたらあいつら。同級生だったんじゃないのか？」

「あつ！？」

現在の乙女を見ていると忘れるが、元は高校の先輩で不良男子だった。

その時の同期と言うのは多いにありえる。

「まさか知りあいだったとはな」

苦虫を噛み潰す表情の松田。

反対に笑いをかみ殺している秋津。もちろんこの失態に対してだ。

「無様だな。助っ人を呼んどいてそれが肝心の相手のお仲間とはな
調査不足もいい所だ」

「くっ」

ひそひそとやりあう。気が済んだところで秋津は別の疑問を片付けに掛かる。

（しかし福本の言う法則性に当てはまらないようだが…ん？ 五十嵐？ 50…Lかつ？）

不良なのになぜか妙に難しいことを知っている秋津。

ここはいわゆるひとつの「ご都合主義」である。

（すると…『QUIZ』『QUEEN』で『Q』『黒須』は『クロス』。そして下の名前はそのまま『X』。作者のやろう。掲示板で受けた助言をそのままネタにしゃがった）

多大に感謝しております。

プチ同窓会は旧交を温める段階から自らを鑑みる段階に着ていた。狩人…ハンター達は手を出したかったが何しろチンピラとは言えど相手は『プロ』のやくざ。

静観するしかなかった。

「あーあ。それにしても大原はまともになったと言うのに俺達はやくざの下っ端か」

「久美ちゃんは可愛いけどそれだけでやってられないしなあ」

「どこで道を踏み外したんだろうなあ」

およそ日の当たる道を歩んでいない。一方の乙女は聖職者。昔の仲間のあまりの違いにわが身を嘆くチンピラ達。

「まだやりなおせるわよ」

「お前みたいにか？ 無理言っな。きれいな体じゃないんだぜ」
腕の刺青を見せる。

「思えば中学だよな。あそこで道を振り外しちゃった」

「ああ。悪いのが男らしいと勘違いしてよ」

「やりなおせるものならやりなおしてえなあ」

「だから明日からやりなおしましょう」

「そう言うことはこれを見てから……えっ？」

杭頭は左腕の刺青を見せるがそれがきれいさっぱり消えている。まとまって明るい所に行くが三人とも刺青がなくなっている。

それどころか華奢な細い腕になっていた。

「お、おい。イガ。お前の髪」

言われた五十嵐は帽子が脱げ落ちたのに気がついた。

帽子が脱げたのは大量の髪の毛に押し出されてた。

「な、なんだ。この髪は？」

叫ぶ声が甲高い。五十嵐だけではない。

剃り込みをいれていた黒須は五十嵐ほどではないが頭部を髪で覆われる。

特に前髪が長めで眉毛に掛かる長さだ。

杭図はショートカットだが左右に小さな房が。

チンピラらしい服装は見事に揃いのセーラー服に。

スカートからむき出しの足は少女ならではの細さで魅了していた。
「はい。きれいな体に戻れたでしょ」

「お、大原：先生ッ」

対等な立場のはずが女子中学生に変貌した三人は乙女を先生と崇めていた。

「がんばってね。気をつけて帰るのよー」

「……はい……」

人生のやりなおしとなったチンピラ達は長らく顔向け出来なかった家族の元に帰る事になる。

このあまりと言えばあまりの展開に首謀者の松田は啞然としていた。

「おめー。この展開考えなかったのか？」

見下ろした秋津の一言。これが次の段階に移させた。

目配せすると秋津以外の五人が乙女を取りこんだ。実力行使に出るつもりだ。

「待て。もう失敗だろう。やめとけ」

松田が女になろうと知ったことではない。

だが何故か止めないといけない気がしていた。

「伝説の不良」をこんなやつらに汚されなくなかった。

その思いが秋津をして乙女の盾になる選択をさせた。

「秋津クンツ！？」

乙女が驚く。秋津はチラッとそれをみて「ハンター」達をにらむ。牽制のつもりだった。

ところが五人はまったく躊躇しない。秋津に向けて攻撃を仕掛ける。

「ぐあつ。て、てめーらっ」

さすがの秋津も五人を相手。しかも乙女をかばいながらでは一方的にやられて行く。

「引つかかったな。秋津。てめーの古臭い不良スタイルならそうすると思っただぜっ」

「な、なんだと？」

「自覚してなかったようだな。積極的にかかわろうとしない男達ばかりの中で、お前だけは大原に近づいていた」

「お、オレがコイツを慕っていたと言うのか？」

それを指摘されて衝撃を受ける。

殴れられているよりそちらの方がダメージを受けた。

「さすがのてめーもそれじゃ手も足も出まい。そして大原も見捨てて逃げたりも出来まいし、この混乱じゃ誰かを女にも出来まい」

つまり最初から秋津もろとも乙女を葬るつもりだったのだ。

むしろ秋津に対する恨みの方が大きい。

「秋津クンッ。わたしは平気だから逃げなさいッ」

「女を見捨てて逃げるなんてまねが出来るかよッ。オレは男なんだッ」

意地を見せる間も「ハンター」達の攻撃は容赦なく秋津に浴びせられる。

自慢の…そして憧れの存在を真似たヘアスタイルがずたずたに崩れ落ちて行く。

本人の膝も崩れた。その場に倒れふす。

「秋津クンッ。しっかりしてッ」

ストッキングが破れるのも構わず膝をついて秋津を抱きかかえる乙女。

秋津はぐったりしていたが眼光は消えていない。かすかに笑ったようだ。

それを嘲笑する松田。

「ひやははははッ。いいざまだなあ。秋津う。どうだ。オカマに介抱される気分はよ」

秋津に屈辱を与えるべく動けなくなつたところで攻撃を止めた。高見の見物としゃれ込んでいた。

乙女は秋津を抱きかかえて泣いていた。
「バカよ。秋津クン。こんなになって」

「へへへっ。オレはコイツらや女になつた連中とは違つんだ…男としての生き方を貫くためになら死んでも良いと思つている。あの日、自分のガクランをスタボロにしてまでオレを助けたあんたのようにな」

朦朧として「修」と「乙女」の区別をつけ忘れている。

「待つててね。いま救急車を呼んであげるから」

「おおっと。そうはいかねえぜ。先生。あんたの場合は俺達の別の相手もしてもらうがな」

下半身を指差す。下卑た笑い声を上げる。

珍しい怒り顔でそれを見つめている乙女。

「あなた達の弱い心。取り除かないといけませんね」

怒りを含んでいるのかわからない乙女の静かな口調。そつと秋津を横たわらせるとゆっくりと立ち上がる。

「このゴッドファーザー大原乙女が、極楽へ行かせて上げるわ」

その気迫に飲まれていた。

「お、おお。常に優雅な笑みをたたえていた大原が、ついに牙を剥いた」

「ご、極楽にだと？ 行かせてもらおうじゃねーかー」

「てめーのスカートの中身でな」

五人が一斉に得物を手に襲いかかった。

ところが乙女はまさに柳に風。最小限の動きでかわし、そして届いた攻撃は柔らかく受け流していた。

事前に秋津を調子に乗つて叩いていた面々は疲れが出てきた。

「無駄な動きが多い。昔のわたしのように」

「うるせえええっ」

振り回すがまるで当たらない。とうとうばてて動きが止まる。

「ここからはわたしのターンね」

乙女には珍しく挑発的なポーズをとる。左手を前に突き出して指差す。

「さあ。あなた達の罪を数えなさい」

「今更数えられるかあ」

松田は鉄パイプを振り上げるがその眉間に乙女の右手の人差し指が届く。

沼田。乱橋。進道。戸村も同様に額に一撃をもらう。

痛くもなんともない。ただ触られただけ。しかし

「お、俺達は五人がかりで一撃も当てられなかったのに」

「逆に簡単に俺達の額に」

「しかもなんだ。あの華麗な動きは」

「う、美しい」

「俺も…あんな風に」

全員が乙女の動きに魅了された。つまり負けを認めた。

「バカが」

最後のは秋津だ。彼は結末を悟った。

そしてその通りになった。襲撃チームは全員が女子になった。

それもどうやら支配欲が反映されたらしく理想の異性。それはやたら華奢で小柄な女子ばかりだった。

支配しやすい姿に自分達がなってしまった。

後でわかるがそろいもそろって150センチに届かない上に肉体系年齢は17才のまま。

つまり女子が大きくなる時期を過ぎてこの身長なのでもはや大きくなれないことを意味している。

間違っても力任せの作戦など出来ない。

松田元紀は新たに「桃子」と名づけられた。

沼田典也は「夏樹」と。乱橋竜太郎から「麗子」に。

進道宗一は「咲」。戸村哲郎は「多恵子」と新しい女としての名前をつけられた。

ちなみにこの五名。支配欲が反転したせいかわたしに使われることが多くなった。

「やったな。ま。オレも連中の仲間だったわけだからこんなこと言うのも変なんだが」

よろよろと立ち上がっていた秋津が笑顔を見せる。

「秋津くん。寝てなきゃダメよ。今すぐ救急車を呼んであげるから」
「いらねえよ。ちよつと撫でられたただけだ」

その割にはふらついているがそれは「男の意地」と言うものだろう。

乙女は笑みを浮かべると秋津の胸に飛び込んだ。

「お、おい」

男には無敵でも女には弱い。いくら元・伝説の不良でも今は女。抱きしめる形になり戸惑った。

「良かった。秋津くんが死ななくて」

「あのくらいで死にやしねーっての」

軽口を叩くが乙女の嗚咽は止まらない。とうとう本格的に泣きだした。

困り果てた秋津だが胸をぬらさせることにした。そして完全に気持ちの整理がついた。

（コイツ…本当に女なんだな。なんだよ。この狭い肩幅）

どこをどう見ても女。そしてその涙が決定的だった。

（もうオレのあこがれた人はいないんだ。そうか。追いかける相手はいなくなったのか）

秋津はやっとそれを理解した。一抹の寂しさが募る。

（コイツは違う。断じてオレの憧れた相手じゃない。間違ってもここに憧れるな。あんな風にならないならなっ）

秋津は新しく生まれた五人の少女を一瞥するとある決意をした。

翌朝。全員が驚いた秋津の変貌。

トレードマークのリーゼントはやめて前髪を下ろしている。そして不良スタイルも改め正規の学生服を着こなしている。

「秋津くん。いきなり変わっちゃったけどどうしたの？」

「やだなあ先生。更生させる立場がそれじゃ」

「え？」

「やめましたよ。不良なんて」

それだけ言っていると秋津は自分の席につく。

（ツツパリつてのはファッションじゃねえ。生き方だ）

静かに闘志を燃やす秋津。

（コイツは最後のプライドだ。例え全員が女にされてもオレは絶対に「男」を貫いてやる）

見た目は「まとも」になったが、内に秘めた「男の意地」はますます強くなった。

あえて不良スタイルを捨てさせるほどに。

次回。ゴッドファーザー乙女。最終回

「さよなら乙女先生」

Lesson 3「ハンター・ミッション」(後書き)

あとがき

起承転結の「転」です。

タイトルこそ「ゴッドファーザー乙女」ですが実質的に主人公の秋津の心境の変化。

いや。むしろ心の奥底にあるものに対する認識と言うべきか。

この辺りは次回のラストで結実するかと。

最初は単純に襲撃に乗ったものの土壇場で裏切って乙女を助けたために怒りの矛先が向いてのリンチと言うはずでした。

しかし陰謀としたほうがまとまりやすく変更しました。

「さあ。お前の罪を数えろ」(元ネタの方)はこの話のためにキープしてました(笑)

文中にもある通り「L」「Q」「X」はある人の助言から。

この場を借りてお礼申し上げます。

次回。「ゴッドファーザー乙女」最終話。「さよなら乙女先生」で、またお会いしましょう。

お読みいただきありがとうございます。

城弾

おまけ

パロティ原典集

サブタイトル「ハンター・ミッション」…少年マガジンで連載していた「ハンマーセッション」のもじり。

「脳天に叩きこむ」と言う意味で転じて「衝撃的授業」とされていた。

内容としては学園に逃げ込んだ詐欺師が教師に成りすまして問題を解決していくと言うもの。

ちなみにここまでの三作のタイトルは全て実写ドラマ化されている。

「女の子は柔らかくていい匂いにするものなのよ。秋津クン」…永井豪先生の「おいら女^{すけ}蛮^{ばんじ}」の「悪夢」の場面。

主人公。女。蛮子は夢の中で女体化していたが、転入先では手違いから女子生徒扱いに。

「愛の夢で愛^{あいむ}夢ちゃん。ううん。ちゃん付けより愛夢姫とでもよびたいわ」…「海賊戦隊ゴーカイジャー」のゴーカイピンクことアイム・ド・ファミーユ姫のこと。

ちなみに衣装は描写の通り。

教育と更生を求めて学校を渡り歩く一人の女。

不良達のつけた「ゴッドファザー」の二つ名を名乗る爽快な女。その名は……

「ゴーカイジャー」OPナレーションの二つあるうちのひとつ。

片方は過去の戦隊ヒーローがゲストの時専用。こちらはそうでな

い場合の時のもののパロディ。

源太郎…拙作「着せ替え少年」で多用したライダーパロ。その時は元ネタの字面を変えるのがパターンだった。

今回は「仮面ライダーフォーゼ」の主人公。如月「弦太郎」のもじり。

『宇宙キターツ』とか…前述の「フォーゼ」で主人公。弦太郎が変身した直後の叫び。

意味としては「宇宙のパワーが来た」となる。

堀江^{ひさし}久改め「堀江ほのか」である。愛称・ほっちゃん…声優・堀江由衣さんの愛称はほっちゃん。

『兄より優れた弟なんざいねえ』…「北斗の拳」の登場人物。ジャギのセリフ。

伝承者争いを義弟・ケンシロウに負けたことで激しい憎悪を燃やしていた。

「話は聞いてやる。三行で説明しろ」…「三行で」は「這いよれ！ニャル子さん」の定番のやり取り。主にもう一人の主人公と言わべき八坂真尋が言う。

これに対して「四行」で返すのがお約束。

「そこまで怒るか？ まるで序盤はヒロインだったのに後半は完全に壊れた『早すぎたヤンデレ』の女性キャラみたいだぞ」…「かつてに改蔵」のヒロイン（笑）名取^{なとり}羽^{うみ}美のこと。

最初は主人公・勝改蔵の方が変な奴だったが回を追うことにこちらが壊れてきて「電波」にもなっって行った。

「知るか！ オレは北海道のどつかにあるレストランで日本刀腰にぶら下げつつウエイトレスをしている奴くらい穏やかだ」…「WORKING!」の舞台。ファミリーレストラン。ワグナリアは北海道にも店舗がある。

日本刀下げているウエイトレスは轟 八千代のこと。

以上三名。八坂真尋。名取羽美。轟八千代の声優は喜多村英梨さんと言う共通点がある。

「ちょっとつてがあつてな。帝江州組のメンバーに」…拙作「美少女組長奮戦記」の架空のやくざ。帝江洲組。

「こいつらと大原は」

「以前にもであっているっ」

「こいつらとの間に何があったのかッ」…「ジョジョの奇妙な冒険」第二部でカース。エシディシ。ワムウの「柱の男」が目覚めた時のセリフ。

「恥ずかしい…もう生きてはいけませんわ」…「海賊戦隊ゴーカイジャー」第29話「アバレ七変化で新合体」で作戦でコスプレしまくったアームがその写真を残りのメンバーに見せられた時のリアクション。

ここはいわゆるひとつの「ご都合主義」である…「いわゆるひとつの」は長嶋茂雄巨人軍終身名誉監督の口癖。

「このゴッドファザー大原乙女が、極楽へ行かせて上げるわ」…アニメ版「GS美神」（原作タイトルはこの後「極楽大作戦」とつく）での主人公。美神令子の決め台詞。

「このゴーストスイーパー美神令子が、極楽へ行かせてあげるわ」

から。

ちなみに後から原作に逆上陸した。

「お、おお。常に優雅な笑みをたたえていた大原が、ついに牙を剥いた」：「聖闘士星矢」の冥王ハーデス編の序盤。寝返ったかつての同胞。デスマスクとアフロディーテに対して初めて攻勢に転じたのを表した元・教皇シオンのセリフ。

それにしてもあれが寝返ったふりと言う芝居ならデスマスクの演技力はアカデミー賞物である（笑）

「ここからはわたしのターンね」：「天装戦隊ゴセイジャー」の登場人物。ゴセイナイトの決め台詞。「ここからは私のターンだ」から。

「さあ。あなた達の罪を数えなさい」：「仮面ライダーW」で主人公コンビの決め台詞「さあ。お前の罪を数えろ」から。

「今更数えられるかあ」：上記「W」の劇場版「A・Z／運命のガイアメモリ」のゲストキャラ。大道克己が上記の名セリフに対して切り替えしたセリフ。テロリストとして多くの罪業を重ねたゆえの言葉。

「バカが」：コミック版「ゲッターロボ」で大軍勢でせめて来たメカザウルス軍団を道連れに自爆と言う選択をした巴武蔵に対する神隼人のセリフ。

Lesson 4「さよなら乙女先生」

この日は二月十四日。バレンタインデー。

秋津の通う高校は、本来なら男子校ゆえにありえなかった光景が、あちこちで展開されていた。

チヨコにたくした、少女から少年への愛の告白。

だが、その少女達は全て元・男。それも不良男子だった。

「か、勘違いしないでよねっ。これは義理なんだから。そう。あんなのことなんて、好きでもなんでもないんだからっ」

パステルピンクのツインテール。ファニーフェイスの堂島だりあが、頬を染めてそっぽを向きつつ、かわいらしくラッピングされた包みを、男子生徒に差し出していた。

当の男子生徒は戸惑っている。

好き嫌い以前にこのだりあ、元々は男だったのである。

それが今やアニメキャラ風の美少女。正体を知らなければ、嬉々としてチヨコレートを受け取るどころだった。

また別の場所では、もつとありえない光景が展開されていた。

「はい。斉藤のお兄ちゃん。チヨコあげるね」

食い意地がたたり、童女の姿になった江原栄介は、エリと言う名の少女として、無垢な微笑でチヨコを突き出している。

高校の敷地内で、小学生女児が高校生男子にチヨコを渡すなど、まさにシニール。

「あ。ありがとうな」

こちらは童女と言うことで、恋愛感情から外れるゆえか、素直に受け取る斉藤。

「あ…あの…」

トレードマークのポニーテールが揺れるほど、もじもじしているセーラー服の少女。近田千鶴。

こちらにも生まれて初めて男に対して、チョコを贈ろうとしていた。相手は、千鶴のかつての姿を彷彿とさせる巨漢だった。

「タケルさん。好きですっ」

顔を真赤にして、精一杯の勇気で告白。

「わ、我輩をかつ！？」

「キン肉ダルマン」と揶揄される巨漢も、チョコをもらうのは初めてだった。

「ありがとう。うれしいのであああああるっ」

喜色満面でチョコを受け取る。

「そ、そうか」

ほっとした表情の千鶴。笑顔のタケルが大声で続く。

「いやあ。それにしてもお前がこんなことをするなんて。もうすっかり身も心も女だな」

言われて千鶴は恥じ入る。

「ば、ばかあっ」

照れからつい一撃を繰り出してしまふ。平手ではなく拳で。それがタケルの胸板にクリーンヒットする、が

「いいパンチだ。女だてらに鍛えているようだな」

平然と受け止めた。

攻撃が通じず、屈辱とばかりに怒り狂うかと思われた千鶴は、逆に恍惚の表情をしている。

（ああ。なんて逞しいんだ。まさに理想の男）

完全に恋する少女だった。

「世も末だな」

秋津が醒めた口調で語る。

トレードマークとしていたリーゼントはなく、学制服も通常のものだ。

それ以外は髪型こそばらばらだが、いわゆる長ランで「不良」をアピールしていた。

放課後の校庭。あちこちで『告白』を目撃してきた五人の男子。20人の不良生徒達をひとまとめにしたZ組。

その中で女性化を免れた「生き残り」達だった。

後は全て新任教師。大原乙女が原因で少女と化している。

その比率。5:15.

肩身の狭いことこの上ない。しかもこの様子を見てわかる通り、15人は完全に精神も女性化している。

恋愛対象が男と言うのは、女性精神の確固たる証拠である。

「なんとしても俺達は生き延びてやる。三月までしのげば、大原は任期切れで消える」

ライオンのたてがみのような、ぼさぼさ頭の財津全次郎がしきる。「ちよつと消極的じゃないのか？」

丸坊主の渡辺^{わたる}亘が口にする。

「生き延びりゃいいのさ」

まさにそのために、秋津はこだわり続けた『不良ファッション』を捨てた。

「だが攻撃は最大の防御って言うだろ」

顔の右半分が髪で隠れた男。植田右京が右手でコインを弄びながら言う。

そのままそのコインを高く飛ばし、左手の甲と右の手のひらで受け止める。

「表か。運はこちらに向いているぜ」

それが幸運のしるらしい。にやりと笑う。

「むつ。ならば任せていいか？ 五家宝連ナンバーワンの博徒であるお前に」

「ああ。任せろ」

二人で話を進めるが、秋津が黙っているはずがない。

「おい。なんだその『五家宝連』ってのは？」

不良スタイルはやめても、突っ込み気質は変わらない秋津。

「ふふふ。オレたち五人のことだ。何しろオレの名は『全次郎』だしな」

「『全次郎』が『五家宝連』に加わってどうするよ…まあいい。好きにしな。オレは関係ない」

呆れたように秋津は言うが事態は変わらない。

いよいよ最後の抵抗が始まった。

「大原。放課後に麻雀で勝負だ」

翌日、一時間目のロングホームルーム。

入ってきた乙女にいきなり植田は勝負を要求した。

今まで女子になったもの達は、何らかの形で、乙女に「負け」を認めているケースが多い。

ならば逆に乙女に勝てば、少なくとも自分は助かるのではないか？

そう考えた生き残りの男子五名…財津の言葉で言うと、五家宝連は『攻撃は最大の防御』を地で行くことにした。

つまりそれぞれ、得意技で勝負をしかけると言うものだ。

「さすがだな。伊達に自宅に全自動麻雀卓を設置して、連日卓を囲んで、しまいにや奴の家が『雀荘・植田』とまで言われるほどの麻雀好きじゃねえな」

（さあどうだ。これで勝負を避ける。つまり逃げれば、それはすなわちこの植田右京の勝利と言うこと。屈服せねば女にはならない）
そう言う計算であった。だが

「ごめんなさい。先生。麻雀はわからないの」

一体、何着もっているのか？ この日もスーツ姿の乙女が謝る。

「で、出来ないと？」

出来ることを避ければ「逃げ」とれる。

だが、最初から出来ないのであれば、敗北感などあるはずがない。

プロレスラーが、リングと言う共通点はあれど、ボクサーに破れても。

マラソンランナーが、100メートル走で、スプリンターに破れても、敗北感はない。

申し訳なく思ったのか、明るい声で乙女が代替案を出す。

「あ。でもトランプなら少しは出来るわよ。ポーカーとか」
状況が変わった。植田の表情も変わる。

「面白い。ポーカーは私のもっとも得意とするゲームだよ」

何故か口調の変わる植田。

「よし。近場の雀荘でやるつもりだったから放課後としたが、トランプなら今でも出来る。誰かトランプもってないか」

しかし誰ももっていなかった。

学校に来ているのだから、当然と言えば当然だが。

「それなら植田様。わたくしが買ってまいります」

場違いな胸元の大きくあいた、アメリカンタイプのメイド服。それもピンク色。ボブカットの小柄な少女が名乗り出た。

「ああ。それじゃ頼むぞ。松田」

「はいですう」

このメイドは前回「乙女襲撃計画」を首謀した、松田元紀の変貌した松田桃子であった。

元紀としての支配欲が反転して、尽くす存在になってしまった。だから『メイド』である。

掃除等を嫌がるどころか、喜んでやる。

もつとも大半が『理想の女子』と変貌したこのクラス。

掃除当番をサボるものは、少女達にはいない。

桃子は正門から堂々と、近所のコンビニへと買いに出た。

机を向かい合わせて体面に座る乙女と植田。

「先生。学び舎でこのような博打など、望ましくありませんが」
和服姿の文乃が進言する。和風だからなのか、表現も古風に『学び舎』だ。

「これもコミュニケーションの形の一つよ。福本さん。ふれあいが更生につながるのよ」

「なるほど。だが勝敗度外視の遊びとはいかないぜ。俺が勝ったらこいつら全員、元の姿に戻してもらうぜ」

「うーん。先生がわざとやってるんじゃないんだけどなあ」

とぼけているわけではない。条件が揃うと、勝手に発動する能力なのである。

何しろ本人からして、その能力の『被害者』である。

ただし、ただの一人も男に戻りたいとは言わない。

まるで、最初から女性として生を受けたかのように、自然に振舞っている。

同時に、アウトローの殻を脱ぎ捨て、新しい姿でやりなおしてる。だからか全員、とにかく明るい。

「だしたら先生が勝つたら、あなたも女の子になるの？」

今までの流れから行けば、当然の疑問だ。むしろ「確認」。

「なってやるさ。負けないけどな」

双方の手元に積まれた十円玉十枚。チップに見立てている。

そのチップがなくなったら負けである。

ポーカーは配られた五枚のカードで役を作り、その強弱で勝敗をきそうゲームである。

下から行くと何も揃ってない。通称「ブタ」

同じ数字が二枚の「ワンペア」

それが二組の「ツーペア」

三枚揃った「スリーカード」

数字のつながった「ストレート」は、ハートとかスペードと言う「スート」がばらばらでもOK。

逆に数字はばらばらでもスートが五枚同じ「フラッシュ」

スートが同じで数字のつながった「ストレートフラッシュ」

同じ数字二枚と、別の数字三枚の組み合わせ「フルハウス」

同じ数字四枚の「フォーカード」

10 J A K Q…ジャッカー…じゃなくて、とにかくこの五枚でスートが同じだと「ロイヤルストレートフラッシュ」

基本的にはこれが最上位だが、あらゆるカードの代役が出来るジョーカー…ワイルドカードが加わると「ファイブカード」が成立してさらに上になる。

スートの強弱は上からスペード。ダイヤ。ハート。クラブの順である。

同じ役ならこれでジャッジする。

そしてポーカーとは駆け引きがものを言う。

基本は「ポーカーフェイス」の由来ともなった無表情で、相手に自分の手を悟らせないが、逆手にとって、良い手なのに自信のないそぶり、相手に強気に出させチップを大量に掛けさせて、それを奪ったり、逆に弱い、それどころか「役」が成立すらしてないのに、いかにも強そうに振る舞い、相手に勝負から降りさせることが出来る。

運だけでなく頭脳で勝負を左右出来る。ゆえに植田は自信をもっていた。

「それでは配らせていただきます」

やはり前回の襲撃のさいに女子化した沼田夏樹。

こちら青いメイド服。桃子と違い、露出の少ない英国タイプ姿で、ディーラーを務めることになった。

尽くすタイプになったので、どちらの命令にも従順に。

言い換えればどちらの味方でもなく、公平な存在である。

「始めるか」

参加料として植田はチップを一枚だす。それでカードをもらう。乙女も同様にした。

植田は机に伏せられたカードを拾い確認する。

「2枚変えてくれ」

チップを出して交換を要求する。ひと勝負につき交換は一度だけ。二枚のカードを受け取る。思わずにやりとし掛かる。

（いい手だ。クラブ。ダイヤ。ハート様のK。キング オブ ハートだな。後はクラブエース。ダイヤジャックか。これだと向こうのロイヤルストレートフラッシュの確率はかなり低くなる）

もちろんスリーカードより強い手には、そこまで行かなくともある。

だがイカサマ抜きでそんなに簡単に揃うものか。そう多寡をくくっていた。

「先生。交換は？」

長い髪をまとめ上げたメイド姿。ディーラーの夏樹が尋ねる。

「いいわ。これで勝負よ」

「なにいつ!？」

植田が驚くのも当然。カードは伏せられたまま。見てもいない。

強いのか弱いのかも知らない。それで勝負だと？

ざわ・・

ざわ・・

周辺もざわめく。その乙女の大胆さに。

「ふざけてんのか？」

最初に「怒り」がきた。

「こんなの運任せでしょ。だったら見ないほうがいいわ。表情ではれちゃうし」

乙女は笑顔で言うと、チップを植田と同じ数だけ場に出した。

なるほど。自分のカードを知らないなら、表情に出るはずもない。負けたらどうする気だ？」

心配しているはずはない。揺さぶりで言う植田。

「私が負けを認めたら、みんな男の子になるのかしら？」

「そんなん」

ギャラリーから悲痛な声が上がる。十文字樹里だ。

「このみが…男になるなんて、わたし耐えられせんっ」

「あたしもよ。樹里。あなたが男になってしまっなんて、我慢出来ない」

自分ではなく、相手の心配をしていた。

「お前らな、二重の意味でどっちかだけでも、戻ったほうが正常なんだがな」

不良ファッションはやめても、もって生まれた突っ込み気質は変わらない。

秋津が指摘する。

樹里。このみも元々は男子。

だから男に戻れば「正常」。

そして、現在の二人は「女同士」で「恋人関係」。

どちらかが男になれば、ノーマルカップリングと言うわけだ。

「秋津。わたしは女になったことを、後悔なんてしてないわ」

どこか上から目線。お嬢さま口調の樹里が言う。

「あたしもよ。樹里。あなたがいてくれるなら」

「このみ……」「樹里……」

瞳を潤ませて見つめ違い、顔を寄せる美少女二人。

ほつとくと「始めそう」だった。

「みんな勘違いしているけど、私の目的はあなた達の更生です。別に女の子にしたいわけじゃないのよ」

ちらりと意味ありげに秋津を見る乙女。

（何だ？ 今のは？ 更生しているからオレは対象外と言うことか？ だとしたら見かけでだまされやがるぜ）

そう。彼は姿を変えても、生き方は変えてない。

「更生の結果として、女の子になっちゃうみたいなの」

ここであたりを見渡す。少女達は不安そうだ。

「だから植田くん。私としたらこの子達が、例え男の子のままでいいのよ。ただ、女の子に生まれ変わったのを、受け入れてあげてだけ。それは男の子でも同じ」

その発言で少女達は、安堵の表情になる。

「よかったあ」

「例え男になっても、乙女先生はあたし達のこと、見捨てたりしないのね」

「それを聞いて安心したわ」

（なんだコイツら？ 男に戻るのがイヤなのか？ それに、どうしてここまでこのオカマを慕う？）

秋津にはわからなかった。

「ようするに…失うものは何もないと？」

それで納得した植田。負けたところで、単に元に戻るだけ。
だが、自分は違う。この勝負に負けると、恐らくは自分も、あの
軍団に加わってしまう。

それでは重圧にも違いが出る。

（勝ってやる。勝てばいいんだろ。なら）

気を取りなおして彼はチップをさらに出す。双方一度だけ認めら
れる権利。上乘せ（レイズ）だ。

「2枚レイズだ」

まさに運試しだった。負けてもまだチップは半分残る。リスクは
少ない。

「2枚ね」

乙女は軽い調子で、チップ代わりの十円玉を場に出す。

「先生も上乘せしちやおうかな」

彼女は残りのチップを全部出した。

「ぜ…全部だと!？」

「どうせ後一枚出したら、次の勝負でレイズに対応できなくなるわ。
それならこれで勝負よ」

まだ2月。汗ばむ季節ではない。だが、植田は冷や汗をかいて来
た。

（な、なんて女だ。伏せたカードが何かも判らないのに…そうだ。
あのカードが何かはわからない。そんなのにビビッてられるか）
自らを鼓舞していた。そうでないと平気でいられない。

（だが…ブタかも知れないし、ロイヤルストレートフラッシュかも
しれない。大原のことだ。下手したらキングとジャックの絵札を、
全部クイーンにしたファイブカードも考えたほうがいいのか？）

まさに「疑心暗鬼」だった。

こうなると千早…もとい、マイナススパイラルだった。悪いほう
に考えて行く。

「さあ？ コール（勝負）オードロップ（降りる）？」

乙女の性格だと挑発はない。単純に意志を確認しているだけだが、

植田にはプレッシャーになった。

それから逃れようと、半ばやけくそで応じかける。

（勝負してやる。負けたら女になる。勝負しかない。コールと言うぞ。コール。コール。コール。コール。コール。コール。）

だが、緊張で口が渴き、声が出せない。

そして彼は、倒れた。

そこには、カジノのディーラーを思わせる衣装の美少女がいた。

襟足までの長さの髪が、きれもののイメージだ。

「こいつ…変身するのまで博打がらみかよ」

既に勝負は見えていた。そう言わんばかりに、醒めた秋津の言葉だった。

植田右京…再起不能<sup>リタイア
うえた・うみ</sup>

そして、植田生美として新生した。

落胆する生き残り男子。

気持ちを切り替え、財津は言う。。

「ふん。植田はしよせん、俺達の中で一番の小物」

「お前、ひでー奴だな」

ばつさり切って捨てた財津に、律儀に突っ込みをいれる秋津。

「次はお前に任せていいか。我ら四天王の中で一番の体育会系のお前に」

「おい……『五家宝連』じゃなかったのかよ？」

秋津の突っ込みに妥協はない。

「ふっ。四人だからな」

意味不明。

「勝てばいいんだろ。勝てば」

言っと次の刺客。渡辺亘は、トレードマークの坊主頭を自分でなでた。

次の週。体育館。

これまたホームルームの時間で、勝負となった。バスケットスタイルの渡辺と乙女が向かい合う。

ともにタンクトップと短パン姿。乙女は髪をまとめ上げている。

「こらー。汚いぞ。ナベツネ」

亘が「ツネ」とも読める。そして苗字が「渡辺」だから、こう言うあだ名だ。

「さすがにごり押しが得意よね。ナベツネだけに」

「この前なんか、意見したら袋叩きにされた後輩がいたと言っわよ」

『女子』はもちろん乙女の味方だ。

「オレをその名で呼ぶなああああつ」

彼も快くは思っていない。

「うっさい。ナベツネ。体力勝負なんて、女の子が不利に決まってるじゃない」

声優並のやたら綺麗な声で、きつい言い回しの堀江ほのかの言葉が、女子の総意だ。

「あほか。こいつにまともに勝たないと、オレは女になっちまうだろ。イヤでも正々堂々やるしかないだろ。だから体力差関係ないこれで決着つけるんだしよ」

渡辺の持ちかけた勝負はフリースロー勝負。

十球投げて、ゴールの数が多いほうが勝者だ。

同点だった場合、投げ続けて差のついた時点で決着のサドンデスとなる。

「さあさあ。この勝負。どちらが勝つと思う？」

あっという間にTS娘クラスタになった植田生美が、賭場を開く。

「ちよつと。賭け事はダメよ」

さすがに教師として見過ごせない。

「お金はかけてないです。食券です」

言っまでもなく学食のである。

「バスコ……じゃなくてビスコと言うのも考えたけどね」

「食べちゃいそうで」

ぴーちくぱーちく。きゃぴきゃぴが止まらない。

「さっさと始めろよ」

男達の味方とも思えないような口調で、秋津が促す。

勝負は意外な形でついた。

まず最初の十球は、両者ともに完全にいれた。ここからサドンデスに入る。

これもともに5球連続で成功。だが、少々疲れが出てきた。

（へっへっへ。実はこうなりや体力勝負なんだよな。女じゃそろそろきついだろ。ましてやそのムダにでかいおっぱい。ボールを投げるのに邪魔だろうしよ。オレはまだまだ元気だぜ）

勝利を確信した……つまり気の緩みが出た。

そしたら、それまで意識しなかったものが気になり始めた。

（……本当に、でけー胸だな。あー。失敗したな。この勝負に勝てば、俺が胸を揉み放題とでもすりゃよかった）

「やりたいさかり」の男子高校生である。

一度、火が着いたらもうだめ。別の意味でも元気になってしまう。（ま、まずい。こう突っ張ってちゃあ、まともに歩けもしねえ。気を逸らさないと）

一旦乙女から目を外そうと振り返ったら、そこには美少女軍団。

しかもほとんどがスカートなので、白い太ももがいくつも。

普段なら特に意識しないが、別のところが元気な現状では、気になってしまう。

その少女達が歓声を上げた。

渡辺が振り返ると、ゴールのリングからボールが落ちたと思われる場面。決めたのだ。

「さあ。あなたの番よ。渡辺くん」

乙女の唇に目が行く。もう何を見ても「男ならでは」の「性欲」

に直結してしまう。

なんとか平常心を取り戻そうとしたが、結果として「元氣過ぎて」正確にできない。

外した途端に、自分も男性に愛でられる存在となっていた。
男としての欲望が、彼を彼女にしたのだから、なかなか皮肉である。

「勝負アリね。それじゃあなたは若葉ちゃんで」

「あー。これでもうナベツネとか言われないですね」

坊主頭から一転。黒いロングヘアの渡辺若葉が、投げやりに言う。

それを見ていた男子陣営。

醒めた様子で見ている秋津。一心不乱にスケッチしている、オルバツクの少年。山中芳郎。

そして、恍惚の表情をしている財津。

「う…美しい」

「あ？ 何か言ったか？」

「な…なんでもないっ」

だが、彼の視線は若葉の黒髪に注がれていた。

「おい。まだやるのか？」

秋津に突っ込まれて財津は我に帰る。

「ふっ。当然よ。渡辺など、わが四天王一の小物」

「…お前、それしかいえないのか？」

「だが、我ら三巨頭には、まだ山中がいる」

「ああ。博打でダメ。バスケでダメなら…マンガで勝負だ」

スケッチには少女に見える存在が描かれていた。

「一週間まってくれ。俺が本物のTSマンガって奴を見せてやる」

「マンガだあ？ それでどんな勝負になるんだよ？」

「いや。そうとばかりは言えんぞ」

財津が自信満々に言う。

「なんでも奴の腕はプロ級らしい。聞いた話じゃ、どこかの暴力団が、警察に目をつけられない資金調達方として、奴にエロマンガとホモマンガを描かせて、即売会で売りさばいたとかも」

「う、嘘だろ？」

「まあ都市伝説だと思っがな」

漫画と言う特殊技能では勝負にならないと、女子達は主張したが、なんと乙女は絵も上手かったと判明。

それにより勝負が決まった。

一週間でページ数無制限。1ページ。ひとコマでもいいし、10ページの大作でもいい。

アシスタント使用も自由だが、必ず本人がストーリーを考えること。

そしてテーマだが、マンガの技量に長けているからと、山中がテーマは乙女に合わせた。

それで「TS」をテーマにした。

なるほど。既に17人が女性化。本人もTS娘。題材には困らないからと、乙女に心酔する元・少年。現・少女達も納得した。

しかし、これも罠。

（くくく。なまじ知りすぎていると、生々しくてかけないものだ。その点、おれは単なる題材としてしか捉えてない。クールに作業できるぜ）

知りすぎる弊害。それを計算していた。

（「TS」か。最近よく聞くあのあたりだろ。楽勝だ）

この時点で既に間違いを犯していた。

乙女陣営はだりあを助っ人にして漫画作成。18ページ。
山中は一人で12ページを描いた。

それを投稿サイトなどで披露。3日間で、反応のよかったほうが勝者だ。

もちろんTS系サイトに投稿したのだが

「なっ。何でだっ？ どうして俺のマンガが、こんなぼろくそに叩かれているっ？」

愕然とする山中。

乙女のも慣れてないから、上手いはずはない。

だが、ある日、突然に男から女へと性転換したとまどい。葛藤。そして「女として生きていく」覚悟は伝わってきた。

対して山中のはプロ並だった。ただし、作画に関してはである。批評もストーリー面を中心に叩かれている。

「何故だ？ どうして俺のより、こんなへたくその描いたほうが受けている？」

情報処理室。授業で使うパソコンが整然としている。

その中の一台の前。勝負の場となったサイトを見ながら、山中は問いかけをしていた。

財津も首をひねっていた。ぼさぼさ頭をかきむしり、考えても見るが判らない。

傍らの乙女は勝ち誇るでもなく、静かに見ていた。

（オレはマンガも良くしらねーが、ひいき目抜きにして、どう見ても山中の方が上手い。それが負けるとは…わかんねーな）

その疑問には秋津も答えられなかった。

しかし意外なところから、答えがきた。

ドスドスドス。

凄まじい迫力の足音が近寄ってくる。

やがて壮年の男性の姿が見える。

和服姿。貫禄のある男性だ。

「あら？ 戒被^{かいばら}先生」

「このマンガを描いたのは、きさまかあっ？」

乙女に挨拶も返さず、美術教師。戒被憂懺は、紙の束を叩きつけた。

「そ、それは俺の漫画」

そう。山中のマンガを、プリントアウトしたものだ。

「貴様か？ 貴様は失格だあつ。馬鹿者っ」

「ええっ？ なにを根拠に？」

いかにツツパリとは言えど、相手が悪い。

人間の格が違いすぎた。

それでも不良の端くれ。抵抗を試みる。

「言いがかりはやめてもらおう。俺の方が上手いだろうが」

「技巧自慢に走るとは愚かものめっ。貴様は本質をわかってない」

「わかってるっ！ TSとは男が女になるのを指すのだろうっ！？」

「ふふふ。まだ判らないか？ いかに外見を女性的に見せ、社会的に女として扱われようが、あくまでそれは女装。だが、TSと言うのは肉体変化が伴ってこそだっ」

（そうか！？ このサイトでは趣旨に外れていたから、叩かれていたんだ）

あまり自信がないので、心に思うだけにとどめる秋津。

「ば、バカな。大手出版者が出した『TSアンソロ』と言うのを読んだことがあるが、14作品中2作品だけが肉体変化で、あとは大半が女装。だから俺は女装でTSになると考えていたのだが…」

「ふ。あの本にも困ったものだ。おかげで大半が誤認識を起こした。その結果、勝負どころか」

見る見るうちに山中の姿が変わって行く。

敗北を悟ったのだ。

そして、まさしくテーマを正確に理解していた乙女に対しても敬意を抱いた。

その結果として、身をもって知ることになった。

「そう。それが性転換よ。山中クン」

「ふん。勝負どころか男まで捨てる羽目になったわ。愚か者めつ。わあっはっはっはあっ」

言いたい放題いったので満足したのか、その場を去る戒被。
新たな少女の誕生も見届けなかった。

「それじゃあなたはイニシャルY・Yで…山中優子さんね」

ブラウスに吊りスカート。メガネと古いイメージの女性漫画家のような姿になった山中。

オールバックでさらしていた額は、前髪で隠された。

そして長い黒髪が腰に達する。

「う…美しい」

財津がつぶやく。

「アホか？ これでもうオレとお前の二人だけだぞ。どうすんだ？」

「いや…お前だけのようだ」

「なに？…財津。お前？」

秋津の目の前で財津全次郎は、少女へと変貌した。

性別をのぞくと、もっともイメージが変わったのは、長く美しい黒髪。

「こ、これよつ。この美しい髪こそ、あこがれ続けてきたものっ」

「お、お前、まさか髪の毛のために『男』を捨てたのか？」

「そ、それもあるけど、なんだかこっち（少女）の方が楽しそうで」
核心だった。

不良として「淀んでいた」彼らは、新しい姿を得て、文字通り生まれ変わった。

そこには、微塵も暗さはない。

明るくポジティブに生きる少女達がいる。それだけだ。

しかし、財津の心を変えるには充分だった。

「いらつしゃい。財津さん。それじゃ、あなたはZ・Zで…ざくろさんでどう？」

「はい。ありがとうございます。先生。ところであたしの髪。どうですか？」

ぼさぼさ頭は、かなりのコンプレックスだったらしい。

一転して、美しい髪の主になったざくろは、くるっと回って見せる。

「うふふ。とっても綺麗よ」

「ありがとうございます」

和服姿のざくろは、ころころとかわいらしい笑みを見せる。

優子。ざくろ。そして乙女はZ組へと戻って行く。

情報処理室に一人残る秋津。ポツリとつぶやく。

「とうとう…オレ一人か…」

それからの秋津は、本当に孤独な存在となった。

それまでは喧嘩もしていたものの、同じような相手がいた。

しかし、回りは全てそれまでの姿を捨てた。

バレンタインを見ても判るように、既に彼女達は自分が男だったと言ふことにこだわりはない。

ただの女の子である。そんな中に唯一の男。

秋津は、ほとんど口を開かなくなっていた。

ほぼ女子クラスとなったZ組。

不良の集まりが逆に模範クラスに。

そして、元・少年とは言えど女子の存在は、男子生徒にも好影響を与えた。

そこから新年度から共学化が決まった。

三月。三学期終了まで残り一週間と言ところ。

現在は期末テストも終わり、翌日から試験休みに突入する。

マジメな女生徒と化した面々はもちろん、女性化を回避すべく、秋津も真面目に試験勉強したので、赤点にはならず。

補習に出る事は避けられた。

幾分は寒さも和らいたが、まだまだ寒い屋上に秋津はいた。

学制服姿で寝転がり、ぼんやりと雲を眺めていた。

（完全勝利だな。あいつのよ）

「あいつ」とは、もちろん乙女のこと。

（さぞかしい気分だろうぜ。不良を片っ端から女に変えちまうてよ。そんなことして何の得かは知らないがな…女に、変える？）

「みんな勘違いしているけど、私の目的はあなた達の更生です。別に女の子にしたいわけじゃないのよ」

ポーカー勝負の時の、乙女が言ったことを思い出す。

（…なんて言ってたよな？ 更生させると言うのは、仕事だからわかるんだが、なんで、こんな面倒なことをしているんだ？）

秋津は上半身を起こした。そして考え続ける。乙女の行動を。

（大原自身、女になったことに対しては、全て受け入れていたよな。だったら別に、男相手に結婚して、家庭の主婦なんて生き方もあったはずだ）

目が真剣になってきた秋津。

（それなのになんで、それもよりによって教師だ？ しかも、慣れない女の姿で？ 突っ張るにも程が…ああっ！？）

秋津はたどり着いた。

（そ、そうか。あいつは…あの人はまだ…）

そこから一週間。三学期終業式。

いよいよ乙女の任期が切れる日だ。

最後の出席をとっていた。女子は全員出席。

乙女との別れを、名残惜しく思っていた。既に泣いている者もいる。

だが、一つだけ椅子が空いていた。秋津のものだ。

「秋津くんはお休みね。残念だね。お別れの挨拶が出来なくて」

残念そうに沈んだ表情の乙女。

なんだかんだで、もっともふれあいの多かった生徒。それに別れを告げられないのは少し未練。

「せ、先生」

「別れ」と言う言葉で感傷的になり、さらに泣く者が増える。

乙女は笑顔を作り、一同に向けて話を切り出す。

「みんな、よくがんばってマジメになったわ。偉いわ。この先で、つらいことがあっても、このがんばりを思い出せば、乗り越えられるわ」

満足そうに語る。

「先生のおかげです。先生が導いてくれなかったら、私達はくすぶったままでした」

千鶴は泣いてしまい、言葉が続かない。

「あのままだったら、ゴミのようになっていたところを、救ってくれました」

美優が涙を堪えながら言う。

乙女はゆっくりと首を横に振る。

「先生は手伝っただけ。立ち直ったのはみんな、あなたたちの力なの」

そして生徒達の顔を見て行く。

「あなた達はもう大丈夫。私の仕事もここまで。あとは…」

「そうはいかねえぜっ」

教室の後方の扉が乱暴に開けられた。

欠席と思われた秋津がいた。

「あ、秋津くん。そのかつこうは？」

下ろしていた前髪が前方へと突き出されて、リーゼントになっていた。

普通の学生服ではなく、懐かしさすら覚える「長ラン」。

スポンもダボダボしたボンタンと、不良ファッション復活である。

「まだオレが更生してねえぞっ。だからてめーの仕事は、終わってなんざいねえっ」

まるでケンカの啖呵である。それほど必死な叫び。

「消えるなら、オレを更生させてからにしゃがれ」

一同、これには驚いた。疎んでいたはずの秋津が『残れ』と言えば驚いて当然。

乙女も驚いていたのだが、それは微笑みに変わる。

そして。目を閉じてゆつくりと、否定の意味で首を振る。

「その必要はないわ。あなたは最初から大丈夫だったもの。ただ、まっすぐ過ぎただけ」

「そんなこと言っなっ」

涙声で秋津が言う。

「頼むから、ここにいてくれ!？」

騒然とする教室。突然声が女の物に変わった様に聞こえた。

「誰? 今しゃべったの?」

「秋津の声が聞こえなかったじゃない」

「でも今の声、聞き覚えがないわ」

「まるで、生徒会役員で、お嬢さまなのに重度のしもネタ好きと言

う感じ。上品なんだか、下品なんだか」

「それよりは、街のケーキ屋さんの看板娘のお姉ちゃんって感じね。困っている人を見捨てられない」

「もうちょつと元気よければ、軽音楽部で、ドラム叩いたている女子と言っ感じなんだけどなあ」

そう。秋津の声が突如として、きれいなソプラノになったのだ。

（ああ。やっぱりな…）

秋津は一抹の寂しさを覚える。そして、自分の首から下を見る。

（見納めか…いいさ。一度は捨てたかつこうだ。それにツツパリと言っのは、ファッションじゃねえ。生き方だ）

秋津は覚悟を決めた。

乙女をまつすぐに見据える。

その乙女は、目を見開いて驚いている。

秋津の顔を見られる位置にいる少女達も驚いていた。

固めたはずのリーゼントが崩れ落ち、前髪が柔らかく、はらりと額に掛かる。

後ろ髪が爆発的に伸びて行く。

顔も優しげに変わって行く。肌も白く。

「……いかないでください……先生」

今度ははつきりと聞こえた。秋津の声が、少女のそれに変わっている。

秋津は走り出す。

走りながら体が縮み、反対に胸がせり出して行く。

腹部はくびれ、臀部は広がる。

ボントンのすそが上へと上昇して行く。

縮むと言っのは厳密には違っ。

ベルト部分から面積が広がり、胸へ。そして肩を覆う。

足を通していた二本のトンネルは融合して、大きな穴になる。

ボンタンが青いジャンパースカートになった。

上に着ていた長ランも縮み、ボレロのようなブレザーに。

見えないところでは、トランクスがショーツに。

何もないところからブラジャーが出現して、秋津の「乳房」を優しく包む。

男のシンボルは消失し、代わりに男を受け入れる部分。

時がくれば新しい命を世に送り出す箇所となる。

「乙女先生ーっ」

今や完全に少女になった秋津が、乙女の胸に泣きながら飛び込む。そのまとう制服も、乙女が変身したときに着ていた無限塾のものに似ている。

違いとしてはウエスト部分にベルトがあることと、ボレロの背中に大きなリボン状の装飾があること。

「乙女先生が二人？」

服とメガネ。それ以外は瓜二つな存在になった秋津。

「あ、秋津くん。どうして？　なんで、あなたまで女の子に？」

「気がついちゃったんです。先生は、姿こそ変わっても、私の憧れたあの人だと」

秋津明義の憧れた「英雄」は「伝説の不良」とまで言われた男。

しかし、その先に「物腰柔らかな女教師」となり、姿だけならまるで似てない。

だが、もっと別のところが同じだったと言うのである。

「先生は、ずっと『突っ張って』いたんですね。楽な道を選ばず。女の人になっても、それをいいわけにせず。常に厳しい道を歩み続け、自分の信念を貫き、そしてあの日、私を助けてくれたように優

しままで」

「秋津…さん？」

「私、あの初めてあったときから、ずっと憧れてました。そしてやっとわかったんです。あなたが、あの憧れの存在のままだと」

（だからか。秋津自身が言う「憧れた存在への転身」。まさにあいつは、追い続けた乙女先生と同じ姿に）

千鶴は、涙を拭いながら考えをまとめた。

「もう泣きやんで。秋津さん。可愛い顔が台無しよ」

「先生…」

そこには、突っ張り続けた不良男子はもういない。一人の少女がいるだけだ。

「嬉しいわ。そんなに慕ってくれるなんて」

「それじゃ先生。ここにいてくれるんですか？」

明るさを取り戻す新たな少女。教師はその期待を裏切るのがつらそうに首を振る。

「残念だけどそれは出来ないわ。まだまだ私が導かないといけない子達が、一杯いるんですもの」

「そう…ですか」

また泣きそうになる秋津。だが、それを堪えて、新たな覚悟を告げる。

「だったら私、教師になりますっ。乙女先生のように導きます。そして先生をどこまでも追いかけて行きます」

その言葉を聞くと、乙女は満足そうに微笑んだ。

「ついてきてね。楽しみにしているわ」

話は終わらない。いつもの「儀式」が、新しい少女が出た時のそれがまだだ。

「それじゃあなたには、先生に一番必要な物を、新しい名前として贈るわ」

「はい」

「『愛』よ。あなたはこれから、秋津愛と名乗ってね」

「……半分、予知夢だったのね。あれ」

「何のこと？」

「ああ。なんでもないです。はい。秋津愛。教師を目指します」

期せずして、教室から拍手が沸きおこる。

新しい少女の誕生を祝い、その覚悟を鼓舞し、そして恩師への感謝の拍手だった。

校門前で乙女を見送る、Z組改め女子クラス。

「んー。明日からがんばるぞー」

乙女並の立派な胸をはり、大きく伸びをする秋津愛。

「おー。気合入っているわねー。『愛』ちゃん」

「当然よ。ざくろ。これから私は、死ぬまで女として生きるんだから、生半可な覚悟じゃ挫折するわ」

「おやおや。この前まで突っ張っていた人の言葉とも思えませんわねえ」

長い黒髪を弄びながら、ざくろがからかう。

「過去形じゃないわ。一生、突っ張り続けるわよ」

その言葉は本気の重みをもっていた。

「そっか」

なんとなく嬉しくなったざくろは、勢いのまま大声で叫ぶ。

「それじゃみんな。今日は愛ちゃんの誕生祝で、ケーキバイキングに行こうか」

「オーッ」「さんせい」

少女達はひたすら明るい。

多少へこたれても、その明るさで乗り越えるであろう。

彼女たちを「吹き溜まり」から救い上げた乙女は、新たな救いを
すべく、この地を去った。

（見ててください。乙女先生。きっと先生のようになります）

夕日に向かって、愛は誓う。

「愛ーっ。なにしてんのー？ おいでくよー」

「あ。待ってよ。ざくろー」

彼女は走りだした。

ゴッドファーザー乙女 完結

数年後の三月。

不良の巣窟として名を馳せた高校。

その校門で一人の女性が、セーラー服の一団に囲まれていた。

「愛先生。本当にありがとうございます」

「よくがんばったわね。おめでとう」

優しく微笑むその女性は秋津愛。

恩師。乙女に形まで合わせているのか、スーツ姿にメガネである。

「はい。まさか『やんきい兄ちゃん』だった私達が、名門女子大に合格できるなんて」

「人間、やればなんでも出来るんですね」

愛には乙女のような能力はなかった。

だが、乙女同様に不良に体当たりで接していたら、全員が精神的に女性化。

そして、それはファッションにも影響を与え、ものの見事に『男の娘』化したのだ。

そう。このセーラー服の一団、全員肉体は男のままである。

「先生もまた、別の高校に行くんですね」

「でも、どうしてあそこに？ あそこはうちと戦争するほどの、不

良学校なのに」

わからないと言わんばかりの「少女」達。

それに対して優しく微笑む秋津愛。

「だからなの。私も昔はちゃんちゃだったから。それを、こうして導いてくれた先生を尊敬しているから、どこまでやれるか『突っ張り続ける』つもりよ」

愛は空を見上げる。

（乙女先生。見てますか？ 私は先生の後を追って、こうして教師になりました。乙女先生もまだ、どこかでこうして、導き続けているのでしょうか。いつか、今の私の姿を見て欲しいです）

遠い場所の乙女に思いを馳せる。

そして、四月。四国のある高校。乙女は今も教壇に立っていた。

超常現象で変身した姿のせいか、未だに妙齡の女性の姿だ。

彼女の前で一人の男子生徒がうずくまっていた。

「ば、坂東。お前、女になっているぞっ」

不良仲間に指摘され、その『坂東』は胸板を叩く。

柔らかい感触が手のひらに。胸には未知の感触が。

「え？ エエーっ？」

驚いているうちに女性化が進む。

「てめえっ。なにをしゃがった？」

リーゼントの不良少年が、乙女に食って掛かる。

「もちろん。みんなを真人間にするための事よ。阿久津クン」

「ふざけんなあ」

「うふふっ。名前といい反応といい、懐かしいわ」

「な、なにを言ってるやがる？」

「昔の教え子よ。なんだか思い出して」

だが、懐かしがっている場合ではない。
気を引きしめて、乙女は不良達に宣言する。

「一学期の内に、皆さんを真人間にします」

乙女もまた、突っ張り続ける。
生涯をかけた戦いだった。

（おまけのおわり）

Lesson 4「さよなら乙女先生」(後書き)

あとがき

これで「ゴッドファーザー乙女」は完結です。
起承転結の『結』は、いかがだったでしょうか？

秋津が女の子になるのは、実は最初からの予定でした。
三話の『夢』は、ああいうのをやると、実際にはその通りにならないと言う『お約束』を逆手にとったミスリードで。

一話の後書きで語ったように『ブラックジャック』第200話『話し合い』にインスパイアされてます。

こちらでも教師に反抗し続けた不良学生が、最後には同じ教師になって、やはり不良の巣窟ばかりに赴任すると言う結末。

そのままなぞりました。

また、後日談の方はもう一つのインスパイア元。「Dr椎名の教育的指導」での桜井先生シリーズのラストを踏襲しました。

本当はZ組の面々それぞれの後日談を書くつもりでしたが、冗長になると判断して秋津だけに。

財津が勝負もせず女性化したのは、裏切った形にしたくて。

そのほうが秋津の孤独感が良く出ると思い。

ただ逆に孤独さに負けて、女性化に走ったとならないようにするから矛盾ですが。

あくまで乙女が憧れの存在と同一と認識したことでああったと。
序盤で千鶴がチョコを渡した相手。タケルはMONDOさんの出した名キャラクター。

筋肉ダルマこと女美川タケルその人のイメージ。
イメージを借りることを快諾してくださったMONDOさんに感謝です。

また『おまけ』のパターンを許可してくださった、ライターマンさんにも感謝です。

そしてこのシリーズを読んでくださった皆様にも、大いなる感謝の気持ちをささげます。

城弾

パロディ原典集

サブタイトル・「さよなら乙女先生」…久米田康治先生の「さよなら絶望先生」より。

余談だが「さよなら」とつく事から、最初から最終話のタイトルにするつもりだった。

そしてこれで四作全て少年マガジン掲載の「教師を主人公とした作品」でサブタイトルを統一した。

「キン肉ダルマン」…後書き内のとおり女美川タケルの通称。筋肉ダルマと、ゆでたまご先生原作の「キン肉マン」のかけ合わせした言葉。

五家宝連…「男組」において主人公を慕う腕利き達五人の総称。

「表か。運はこちらに向いているぜ」…「炎神戦隊ゴーオンジャー」のゴーオンレッドこと江角走輔の占い。

「『全次郎』が『五家宝連』に加わってどうするよ」…上記「男組」の主人公の名前は流 全次郎。彼は五家宝連の一員ではない。

『雀荘・植田』…声優。植田佳奈さんは自宅に全自動の麻雀卓を持ち、声優仲間と卓を囲んでいたことから彼女の家がそう言われていることもあったとか。

お察しの通り『植田右京』の苗字の元ネタはこの人。

「面白い。ポーカーは私のもっとも得意とするゲームだよ」…「ジョジョの奇妙な冒険」（以下J.O.J.O.）に現れた敵。ダニエル・J・ダービーがポーカー勝負を挑まれたときに言い放った言葉。

J A K Q…ジャッカー…スーパー戦隊シリーズ二作目「ジャッカー電撃隊」のこと。「J A K Q」でジャッカーと読ませる。

ハート様のK…「北斗の拳」の序盤に登場するシンの配下。異常な肥満体で、脂肪で阻まれ攻撃が本体に届かない。彼だけ何故か「様」がデフォルト。

キング オブ ハートだな。後はクラブエース…いずれも「機動武闘伝Gガンダム」に登場する、シャッフル同盟の称号。

ダイヤジャックか…前述の「ジャッカー電撃隊」戦士の一人。ブルに相当する。

ざわ…ざわ……漫画家の福本信行先生の使っざわめきの表現。二点リードなのがポイント。

こうなると千早…もとい、マイナススパイラルだった…アニメ版ではなく原典のゲーム。「THE iDOLM@STER」のキャラクター。如月千早は上級者向けでコミュニケーションが取りづらい。

悪いほうに行きだすと、歯止めが利かなくなり落ちていくのを千早スパイラルと表現される。

コールと言うぞ。コール。コール。コール。コール…前述のJOOJOOでのポーカー勝負。主人公。空条丞太郎の放つプレッシャーで極度の緊張に陥ったダービーがなんとか勝負をしようとしている様子。

再起不能^{リタイア}…JOOJOO三部以降において、敵を完膚なきまでに撃退したときに×に現れる一文。

「ナベツネ」…巨人軍・渡邊恒夫球団会長のあだ名。とにかく空気読まない発言が多すぎる人物。

恐らく彼を一番憎悪しているのは、当の巨人ファン。

「お金はかけてないです。食券です」…「魔法先生ネギま」でトトカルチョが開かれるとき、金の代わりにかけるもの。

「バスコ…じゃなくてビスコと言うのも考えたけどね」…バスコは「海賊戦隊ゴーカイジャー」に登場する、ゴーカイジャーと敵対する宇宙海賊。ビスコはお菓子の銘柄。

「じゃりん子チエ」においてやはり賭博のチップ代わりにされたことがある。

警察の強制捜査があった場合「単なるお菓子」と言い張るのが目的。

山中芳郎：「美味しんぼ」主人公・山岡士郎をもじった名前。オールバックと言うのも共通点。

「一週間まってくれ」：「美味しんぼ」の初期において、主人公の山岡士郎が相手を納得させる料理を用意するために一週間の期間を要求することが多かった。

「いや。そうとばかりは言えんぞ」：ドラマ「太陽にほえろ」で、刑事達が偏った方向に推理が行きかけたときにこのセリフとともに山さんこと山村精一警部が部屋に入ってくるケースが多かった。

ドストドストス：「美味しんぼ」海原雄山の足音。

「このマンガを描いたのは、きさまかあ？」：海原雄山と言えばのパロが「この。を作ったのはお前か！？」

美術教師。戒被憂懣：もちろん海原雄山の字ずらを変えたもの。もっともこうして解説しては意味がないのだが（笑）

この局面はほとんど海原雄山のセリフを意識してのもの。

「大手出版者が出した『TSアンソロ』と言うのを読んだことがあるが、14作品中2作品だけが肉体変化で、あとは大半が女装」：「チェンジH pink」のこと。本文どおりTSアンソロと銘打ちながらほとんどが肉体変化の伴わない女装だった。

よほど叩かれたのか、二冊目の「チェンジH Blue」からは比率が少しずつちゃんとTSになって行った。

ちなみにほとんどが変身で、入れ替わりは少ない。憑依に至っては皆無。

「そう。それが性転換よ。山中クン」…劇場版「仮面ライダーW AttoZ/運命のガイアメモリ」のクライマックス。

必殺技の決まった直後にフィリッパが言い放ったセリフ「そう。それが死だ。大道克己」より。

「山中優子さんね」…「美味しんぼ」の山岡士郎とともに「究極のメニュー」を作成するパートナーにして、中盤から妻となる女性の名が栗田ゆう子。夫婦別姓をとってなければ「山岡ゆう子」だったかと。

「まるで、生徒会役員で、お嬢さまなのに重度のしもネタ好きと言う感じ。上品なんだか、下品なんだか」…「生徒会役員共」の登場人物。七条アリアのこと。

「それよりは、街のケーキ屋さんの看板娘のお姉ちゃんって感じね。困っている人を見捨てられない」…「迷い猫オーバーラン」の都筑乙女のこと。

「もうちょっと元気よければ、軽音楽部で、ドラム叩いたている女子と言う感じんだけどなあ」…「けいおん！」の田井中律のこと。説明どおりドラマー。

七条アリア。都筑乙女。田井中律はいずれも声優の佐藤聡美さんが声を担当している。

違いとしてはウエスト部分にベルトがあることと、ボレロの背中に大きなリボン状の装飾があること。…拙作『Panic Panic』の舞台。無限塾の制服。ただし、主人公達の子供の世代の女子制服で、マイナーチェンジがなされている。

おまけ…ライターマンさんの定番パターン。一度物語が締めくくられてから、主人公のその後が描かれる。

「はい。まさか『やんきい兄ちゃん』だった私達が、名門女子大に合格できるなんて」…「Dr椎名の教育的指導」の「桜井先生シリーズ」の最終回で。桜井に反発していた不良生徒達は、ことごとく桜井と同じ存在に変貌していた。

「どこまでやれるか『突っ張り続ける』つもりよ」…『ブラックジャック』第200話『話し合い』で、劇中の不良生徒は自分に接していた教師の考えに打たれ、同じ教師になり、そして不良生徒の更生に挑むように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7875s/>

ゴッドファーザー乙女

2011年12月21日12時49分発行